

## 再編検討資料

### ■資料3

#### 目次

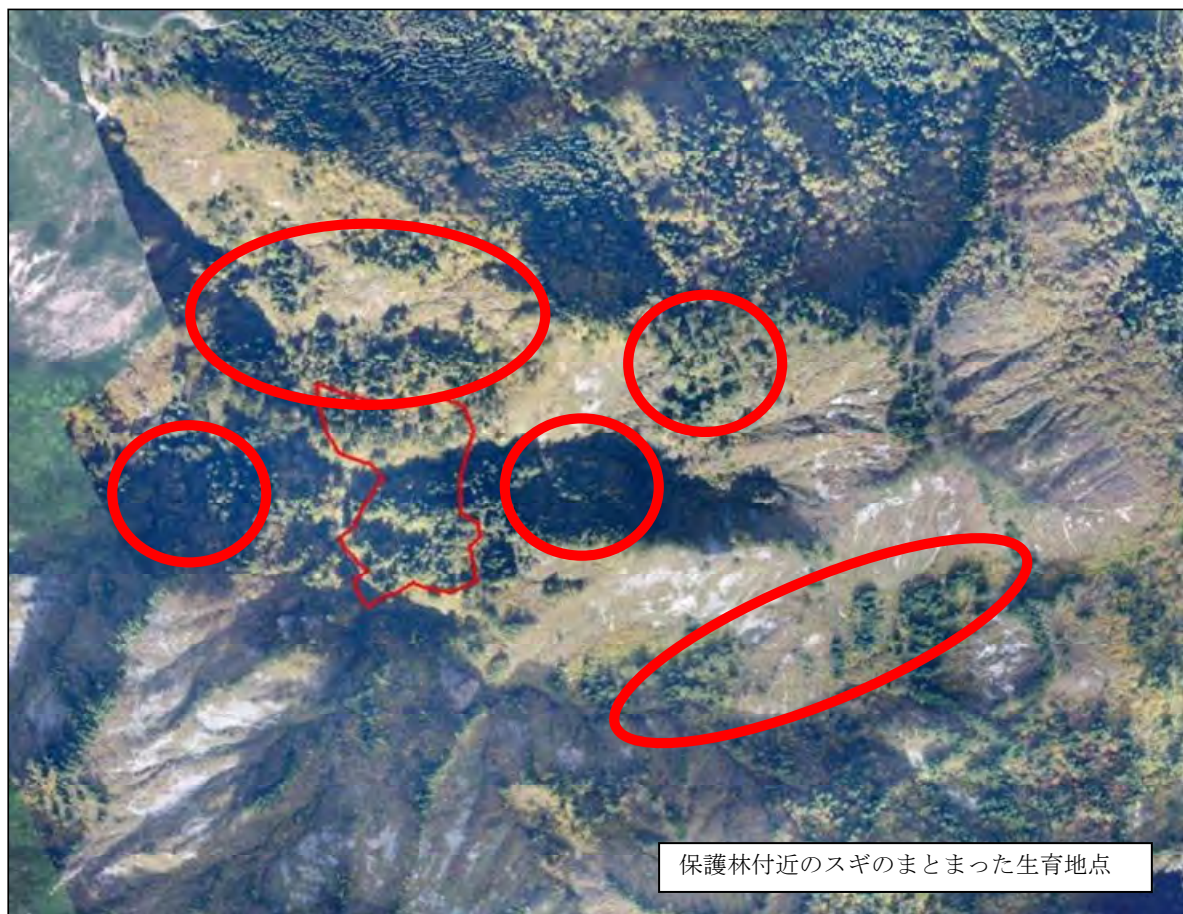
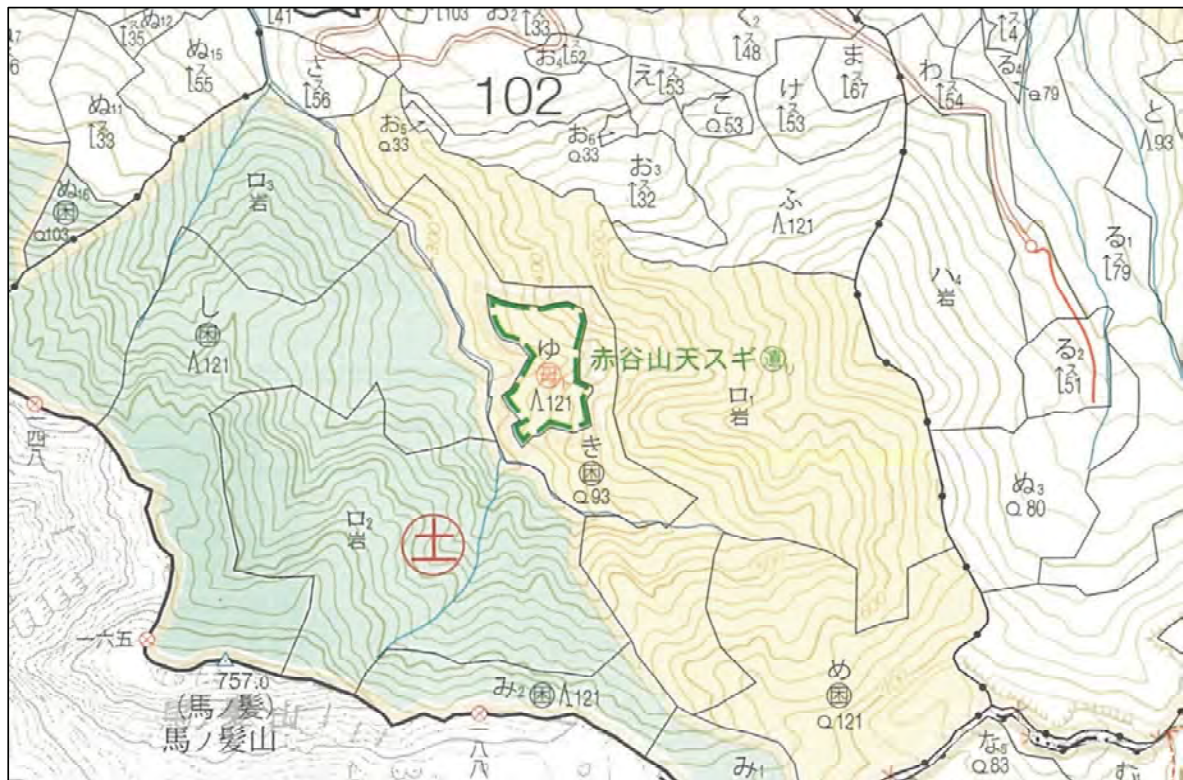
資料3-1. 第2回再編検討委員会で保留とした保護林の再編案.....	1
資料3-2. 保護林名称の変更 .....	52
資料3-3. 鳥獣害対策の検討を追加.....	59
資料3-4. その他の修正箇所 .....	60

資料 3-1. 第 2 回再編検討委員会で保留とした保護林の再編案

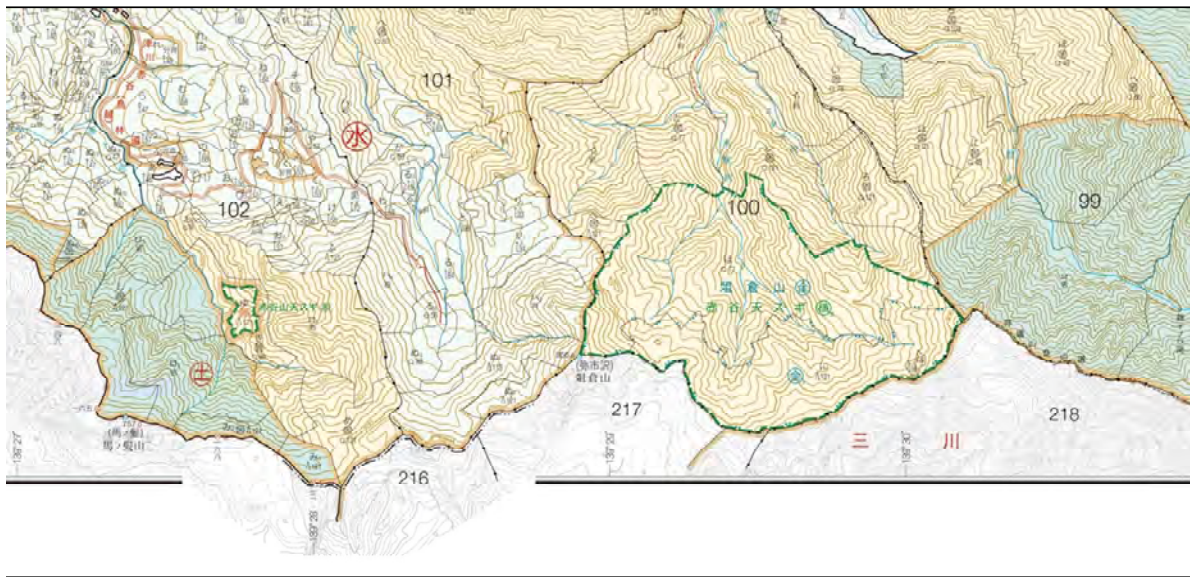
既設区分	名称	面積 (ha)	設定目的	植生概況	保護林の再編に関する検討	新区分および新名称
林木遺伝資源保存林	赤谷山天スギ あかたにやま	3.00	裏日本型東北・北海道型における天スギの遺伝資源を保存するために設定する。	胸高直径40~80cmのスギが優占する林相。	赤谷山天スギ林木遺伝資源保存林は、裏日本型東北・北海道型における天スギの遺伝資源の保存を目的とした保護林である。5ha以上の面積要件は満たしていないが、①周りをミヤマナラに囲われた雪崩地形の尾根部といった特殊な立地に成立しているスギの個体群、④遺伝資源の保護を目的とする個体群を保護対象としているため、希少個体群保護林としてのポテンシャルがある。このため、保留扱いとする。	保留
植物群落保護林	赤谷天スギ あかたに	143.95	通称赤谷スギと呼ばれる天然スギの林分で、種及び学術又は森林施業上貴重な森林であることから、この森林の保護を図るため設定する。	中齢から高齢級のスギが生育している。生育しているスギ立木に枯損木はほとんど見られず、健全に生育している。一部、ツキノワグマによる剥皮がみられる。高木層は高さ25~29m、胸高直径30-104cm (最大はスギ) 程度。	赤谷天スギ植物群落保護林は、原生状態を保ったスギ群落の保護を目的とした保護林である。①大径木に生育した天然林を構成するスギの希少な個体群を保護対象としおり、5ha以上の面積要件をみたしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林

↓	↓
<p>■検討事項：</p> <p>①赤谷山天スギ林木遺伝資源保存林の希少性について。</p> <p>②赤谷スギ希少個体群保護林と両立できるかどうか。</p> <p>③総合的にみた当該森林の方向性について (拡張して結合する、拡張せずに飛び地で結合する(メタ個体群)、それぞれを保護林にする、どちらかを保護林とするなど) 【添付図参照】【様式31参照】</p>	

■赤谷山天スギ林木遺伝資源保存林



■赤谷山天ヌギ林木遺伝資源保存林、赤谷山植物群落保護林



様式-31

現地調査計画及び総括整理表		写真1 保護林林内	写真2 プロット1林内	写真3 ツキノワグマによる樹皮剥ぎ	
保護林名	赤谷山天スギ林木遺伝資源保存林				
整理番号	037				
森林管理局名	関東森林管理局				
① 現地調査計画					
保護林概況写真	調査項目	森林調査		動物調査	利用動態調査
	保護林の概況 (設定目的)	裏日本型東北・北海道型における天スギの遺伝資源の保存。 ・設定日:平成5年 ・面積:3.00ha			
	調査箇所(選定理由) ・ルート(所要時間)	第1回モニタリング地点(H20年度設置)を活用する。 調査プロットは、天然スギが比較的多く見られる林分に、1地点設定されている。 駐車位置から調査地点まで約600m、徒歩35分程度。		-	-
	調査時期、回数	平成25年8月/計1回		-	-
	調査項目	毎木調査、植生調査、定点写真撮影		-	-
	調査方法 (選定理由)	0.1haのプロットを設定し、毎木調査では胸高直径、樹高(20本/プロット)を計測した。植生調査では、植物の種組成の概要を把握した。ツキノワグマによる剥皮被害が顕著に目立つため、クマによる樹皮剥ぎの程度、発生時期、対象木の活力についても把握した。		-	-

保護林外観

② 総括整理表

調査項目	基礎調査	森林調査	動物調査	利用動態調査
結果概要	<p>【保護林概況】 保護林は馬ノ髪山の北東に位置し、全てが天然生林である。周辺国有林は天然生林、人工林1、林地外が斑状に分布し、育成天然林、人工林2も一部見られる。保護林は天然生林とのみ接続する。保護林の南西には民有林が広がる。また、保護林の北側には津川赤谷林道が通っている。</p> <p>【保護対象樹種:スギ】(裏日本型東北・北海道型における林木遺伝資源の保存)</p> <p>【平成24年度基礎調査結果】 前回調査時と比較して、大きな変化は確認されなかった。スギの実生、稚樹は確認されたが、スギの年齢から高齢木の50~70%に及ぶ個体に、幹周の20~50%に及ぶ、ツキノワグマによる剥皮被害が発生していたと報告されている。</p> <p>【調査プロットの代表性検討結果】 前回調査のプロットは、胸高直径40~80cmのスギが優占する林相で、保護林の代表的な地点といえるため、前回調査プロットを活用して調査を行う。</p>	<p>【調査プロット1[継続]:スギ群落】(標高370m)</p> <p>①山腹平衡斜面に成立しているスギ群落。気候の極相林。 ②高木層は高さ20~24m、胸高直径43-77cm(最大はスギ)、植生率100%で、スギが優占し、ホオノキが混生している。 ③高木層・亜高木層を構成する胸高直径18cm以上の保存対象樹種であるスギは28本が生育している。高齢木からなるスギ純林の様相を呈している。 ④次世代を担うスギの中低木(小円部:胸高直径1cm以上、中円部:4cm以上18cm未満)は5本が確認され、また、小円部における植生調査の結果でも、低木層にスギの低木が、草本層にスギの稚樹・実生の生育が確認されている。</p> <p>【ツキノワグマに剥皮被害の状況とスギの生育状況】</p> <p>①胸高直径18cm以上のスギ28本中、内樹皮剥ぎが見られたのが14本(半数)。 ②剥がされた直後のものはなかったが、クマの爪跡の残る比較的新しいものが7本認められる。 ③幹周に対する樹皮剥ぎの程度は、幹周20~40%程度が剥がれているものが多い。中円の1本については、幹周の60%程度まで剥がされ、ヤニの流出も認められる。 ④若干の葉量の低下が見られたものの、すぐに枯損しそうな木は見られない。</p>	-	-
評価	-	高木層・亜高木層に生育するスギは健全に生育し、また、林内には、次世代を担う、スギの中木・低木・稚樹・実生の生育も認められ、本保護林の設定目的である、裏日本型東北・北海道型における天スギの遺伝資源の保存に問題は生じていないと評価される。	-	-
課題	ツキノワグマによる剥皮被害が顕著に目立つため、スギ立木の被害状況を詳細に把握し、遺伝資源の保存を目的とした対策を急いで講じる必要がある。上層を構成するスギは現段階では健全に生育しているが、剥皮被害が顕著であるため、今後の活力状態の変化に留意する必要がある。個体ごとの経過観察が必要である。	保護対象樹種であるスギは現段階では健全に生育しているものの、ツキノワグマによる樹皮剥ぎ被害が顕著である。このまま、樹皮剥ぎ圧が継続していくと、スギの活力に問題を引き起こしていくことが予想されるため、さらなる被害を防止するための早急な樹皮剥ぎ防止対策の検討が必要である。	-	-

様式-31

現地調査計画及び総括整理表		写真1 プロット1林内	写真2 プロット1林内 スギの伏状更新の状況。	写真3 プロット2林内 ツキノワグマによる樹皮剥ぎにより枯損したスギ。	
保護林名	赤谷天スギ植物群落保護林				
整理番号	090				
森林管理局名	関東森林管理局				
① 現地調査計画					
保護林概況写真	調査項目	森林調査		動物調査	利用動態調査
	保護林の概況 (設定目的)	通称赤谷スギと呼ばれる天然スギの林分で、種及び学術又は森林施業上貴重な森林であることから、この森林の保護を図ることを目的とする。 ・設定日：昭和52年4月1日(平成5年4月1日) ・面積：143.95ha			
	調査箇所(選定理由) ・ルート(所要時間)	調査プロットは、保護林内における代表的なスギ群落が形成されている林分に、2地点設定されている。内1地点は、森林生態系多様性基礎調査プロットの調査データを活用しているが、第2回モニタリング基礎調査において本保護林を代表する箇所ではないと判断されたため、本調査において新規に設定した。調査箇所の選定理由は、下表参照。		-	-
	調査時期、回数	平成25年9月/計1回		-	-
	調査項目	毎木調査、植生調査、定点写真撮影		-	-
	調査方法 (選定理由)	0.1haのプロットを設定し、毎木調査では胸高直径、樹高(20本/プロット)を計測した。植生調査では、植物の種組成の概要を把握した。また、ツキノワグマによるスギの樹皮剥ぎ被害が確認されていることから、被害の程度について把握した。		-	-

保護林林内、尾根上のスギは曲がっている。伏状更新木が多い。

② 総括整理表

調査項目	基礎調査	森林調査	動物調査	利用動態調査
結果概要	<p>【保護林概況】 保護林は俎倉山(弥市沢)から北東に広がり、そのほとんどが天然生林である。周辺国有林は約半分が天然生林、その他は人工林1、人工林2よ、林地外が斑状に分布し、一部育成天然林も見られる。保護林は天然生林、林地外と接続する。保護林の北側には一部民有地が見られ、加治川治水ダムが設けられている。また、治水ダムから保護林内を通過して蒜場山へと向かう登山道が設けられている。保護林は俎倉山自然環境保全地域を含む。</p> <p>【保護対象群落：スギ群落】</p> <p>【平成24年度基礎調査結果】 前回調査時と比較して、大きな変化は確認されなかった。スギ群落が分布している区域は、中齢から高齢級のスギが生育している。生育しているスギ立木に枯損木はほとんど見られず、健全に生育している。一部、ツキノワグマによる剥皮がみられると報告されている。</p> <p>【調査プロットの代表性検討結果】 前回調査のプロットは、胸高直径40～80cmのスギが優占する林相で、保護林の代表的な地点といえるため、前回調査プロットを活用して調査を行う。森林生態系多様性基礎調査の代替地点については、カエデ類が優占する林相にあり、第2回モニタリング基礎調査において本保護林を代表する林分ではないと判断されたため、本調査において胸高直径60～100cmのスギが優占し、本保護林の代表的な林相の地点に移設した。</p>	<p>【調査プロット1[継続]：スギ群落】(標高704m) ①山腹平衡斜面に成立しているスギ群落。気候的・土地的極相林。 ②高木層は高さ17～22m、胸高直径30-80cm(最大はスギ)、植被率70%で、スギが優占し、ミズナラ、ブナなどが混生して生育している。亜高木層は高さ10m、植被率30%で、スギ、ブナ、ミズナラ、アカイタヤなどが生育している。低木層は高さ4.5m、植被率80%で、オオバクロモジ、リュウブ、スギなどが混生して優占している。草本層は高さ1.0m、植被率80%で、ズズク、ヒメアオキなどが混生して優占している。 ③高木層・亜高木層を構成する胸高直径18cm以上の保存対象種であるスギは33本生育している。スギと競合する落葉高木は17本生育している。高齢木からなるスギに中齢木からなる冷温帯落葉広葉樹林を形成する落葉高木が混交した様相を呈している。 ④次世代を担うスギの中低木(小円部：胸高直径1cm以上、中円部：4cm以上18cm未満)は16本生育し、小円部における植生調査の結果では、低木層にスギの生育が認められ、草本層にはスギの生育は認められていない。 ⑤プロット内でツキノワグマによる樹皮剥ぎが確認されたが、樹皮剥ぎの程度は軽微である(新規樹皮剥ぎ1本、古い樹皮剥ぎ痕2本)。また、林内のミズナラにナラ枯れが発生している。</p> <p>【調査プロット2[新規]：スギ群落】(標高790m) ①山腹平衡斜面に成立しているスギ群落。気候的・土地的極相林。 ②高木層は高さ25～29m、胸高直径30-104cm(最大はスギ)、植被率90%で、スギが優占し、ミズナラ、ブナなどが混生して生育している。亜高木層は高さ10m、植被率30%で、ブナが優占し、ミズナラなどが生育している。低木層は高さ4.5m、植被率30%で、オオバクロモジが優占している。草本層は高さ1.0m、植被率80%で、エゾユズリハ、ヒメアオキ、ツルシキミなどが混生して優占している。 ③高木層・亜高木層を構成する胸高直径18cm以上の保存対象種であるスギは16本生育している。スギと競合する落葉高木は23本生育している。高齢～老齢木からなるスギに中齢木からなる冷温帯落葉広葉樹林を形成する落葉高木が混交した様相を呈している。 ④次世代を担うスギの中低木(小円部：胸高直径1cm以上、中円部：4cm以上18cm未満)は見られず、小円部における植生調査の結果でも、低木層、草本層にスギの生育は認められていない。 ⑤プロット内でツキノワグマによる樹皮剥ぎが確認された(新規樹皮剥ぎ1本、古い樹皮剥ぎ痕4本)。1本については樹皮剥ぎにより枯損に至り、他の4本についても、樹皮剥ぎの程度は大きい(面積0.1×1.0m～0.4～3.0m程度)。</p>	-	-
評価	-	高木層でスギと競合する高木類が多いものの、林内の亜高木、低木層には次世代を担うスギの生育が認められ、保護対象であるスギ群落は健全な状態で維持されていると評価される。ただし、ツキノワグマによる樹皮剥ぎ被害の発生が認められている。	-	-
課題	上層を構成するスギは現段階では健全に生育しているが、保護林内のスギの一部に、ツキノワグマによる剥皮被害が発生しているため、調査プロットにおいても、発生の有無と程度に留意することが必要である。また、森林生態系多様性基礎調査の代替地点については、本保護林を代表する林分とは考えられないため、本保護林を代表する天然スギが分布する箇所への調査地点の移設を検討する必要がある。	ツキノワグマによる樹皮剥ぎ被害の発生割合は多くはないが、被害の程度が大きいものも認められ、樹皮剥ぎにより枯損したと考えられるスギも認められている。このため、保護林全域を対象としたツキノワグマによる樹皮剥ぎ被害の状況把握調査を実施し、特に被害の大きい場所など、結果によっては、対策の検討も必要になるのではないかと考えられる。	-	-

既設区分	名称	面積 (ha)	設定目的	植生概況	保護林の再編に関する検討	新区分および新名称
林木遺伝資源保存林	一の倉・ブナ いちのくら	7.53	谷川岳におけるブナの遺伝資源を保存するため設定する。	ブナの天然林。保護林内は、胸高直径30~70cm程度の中齢~高齢級のブナが優占する林分が形成されている。保護林内にはギャップ部も多く、そこにはブナの亜高木、低木、稚樹が生育し、正常な更新が行われている。	一の倉・ブナ林木遺伝資源保存林は、谷川岳におけるブナの遺伝資源の保存を目的とした保護林である。5ha以上の面積要件は満たしているものの、周囲にも広く分布するブナ群落の一部分であることから、遺伝資源としての希少性がそれほど高くはないと考えられることから、廃止し、引き続き自然維持タイプとして管理する。	廃止

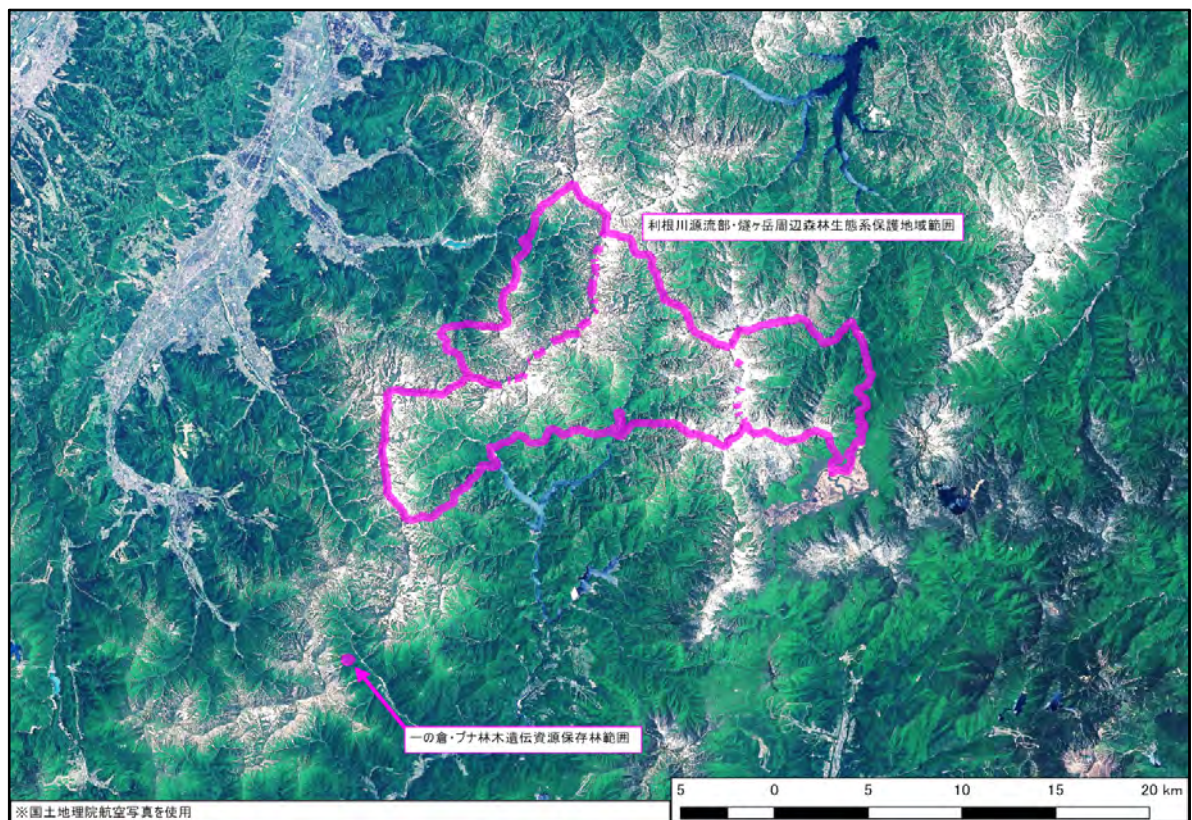
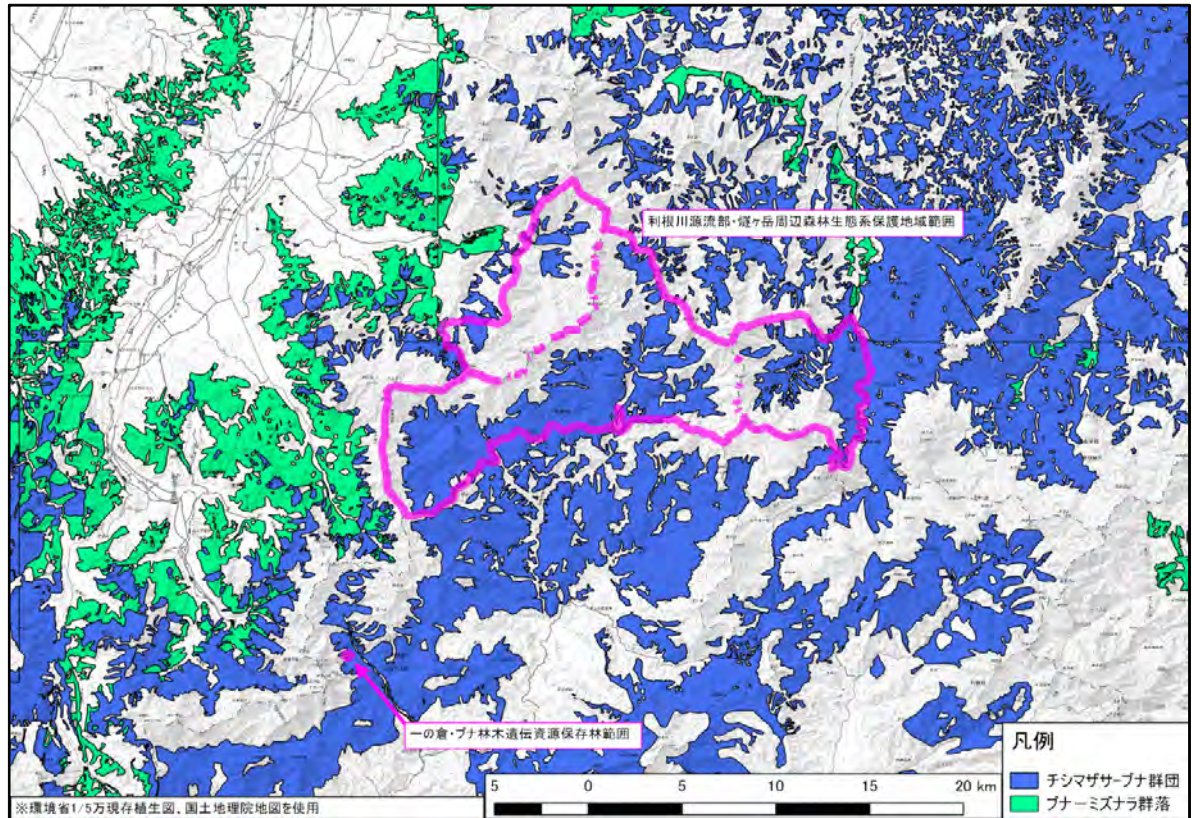
第2回再編委員会における議論

<p>ブナの天然林。保護林内は、胸高直径30~70cm程度の中齢~高齢級のブナが優占する林分が形成されている。保護林内にはギャップ部も多く、そこにはブナの亜高木、低木、稚樹が生育し、正常な更新が行われている。</p> <p>なお、本遺伝資源保存林の湯檜曾川を挟んだ対岸には、樹幹も大きく、良好な生育状態にあるブナ林が広く分布している。</p>	<p>一の倉・ブナ林木遺伝資源保存林は、谷川岳におけるブナの遺伝資源の保存を目的とした保護林である。5ha以上の面積要件は満たしているものの、周囲にも広く分布するブナ群落の一部分であることから、遺伝資源としての希少性がそれほど高くはないと考えられる。しかしながら、全国の気候帯を代表する形で配置されたブナ属の林木遺伝資源保存林の一つを担っており、その活用が期待される保護林である。このため、保留扱いとする。</p> <p>■今後の検討課題：①保護林区域の検討。湯檜曾川を挟んだ対岸に分布するブナ群落を含め、保護林を取り巻く同様な林相にある林分の一体的な保全の必要性を検討する。</p>	保留 (希少個体群保護林)
---	--	---------------

事務局案  
希少性が認められない




<p>一の倉・ブナ林木遺伝資源保存林は、谷川岳におけるブナの遺伝資源の保存を目的とした保護林である。5ha以上の面積要件は満たしているものの、周囲にも広く分布するブナ群落の一部分であることから、遺伝資源としての希少性がそれほど高くはないと考えられる。当該地域のブナ群落は、利根川源流部・燧ヶ岳周辺森林生態系保護地域に代表されているため、廃止とする。【添付図参照】【様式31参照】</p> <p>⇒本保護林周辺は、レク森 (一の倉・マチガ沢風景林)、上信越高原国立公園谷川岳集約施設地区の自然探勝エリア、みなかみ町谷川岳エコツーリズム推進全体構想の自然探勝トレッキングの利用拠点に位置付けられており、良好な自然環境の保護と適正な利用を行う地域であることから、保護を念頭に置いた、レクリエーション型の利用を検討する。</p>	廃止
--	----

■ 一の倉・ブナ林木遺伝資源保存林





様式-31

現地調査計画及び総括整理表		写真1 プロット1林内	写真2 プロット2林内	写真3 プロット2林内に生育するブナ大径木
保護林名	一の倉・ブナ林木遺伝資源保存林			
整理番号	034			
森林管理局名	関東森林管理局			
① 現地調査計画				
保護林概況写真	調査項目	森林調査		動物調査
	保護林の概況 (設定目的)	谷川岳におけるブナの遺伝資源の保存。 ・設定:平成2年 面積:7.53 ha		
	調査箇所(選定理由) ・ルート(所要時間)	第1回モニタリング地点(H21年度設置)を活用する。調査プロットは、ブナが生育する林分に2地点設定されている。 谷川岳ロープウェイ駐車場に駐車し、一の倉沢まで行く送迎バスに乗る(20分程度)。一の倉沢バス停から調査地点まで約150~200m、徒歩10分程度。		-
	調査時期、回数	平成26年8月/計1回		-
	調査方法 (選定理由)	0.1haのプロットを設定し、毎木調査では胸高直径、樹高(20本/プロット)を計測した。植生調査では、植物の種組成の概要を把握した。また、低木・稚樹・実生の生育状況把握するため、プロット内の小円部~大円部の8区画ごとに、計測対象外の保存対象樹種の低木・稚樹・実生の被度・群度や生育本数を記録した。		-

保護林概観、保護林林内 ブナ大径木が多い

② 総括整理表

調査項目	基礎調査	森林調査	動物調査	利用動態調査
結果概要	<p><b>【保護林概況】</b> 本保護林は、谷川連峰の一の倉岳から延びる一の倉尾根末端の南東側から、一の倉沢までの範囲にある。保護林内はほぼ天然林でチシマザサザナ群団、ブナ・ミズナラ群落、ヒメアオキ・ブナ群集が生育する。周辺はチシマザサザナ群団の他、河川沿いにヤナギ高木林、ササ自然草原、ウラジロヨウラク・ミヤマナラ群団といった亜寒帯、亜高山帯自然植生が成立している。</p> <p><b>【保存対象樹種:ブナ】(林木遺伝資源の保存)</b></p> <p><b>【平成25年度基礎調査結果】</b> 保護林内は、胸高直径30~70cm程度の中齢~高齢級のブナが優占する林分が形成されている。保護林内にはギャップ部も多く、そこにはブナの亜高木、低木、稚樹が生育し、正常な更新が行われており、今後もブナ林として維持されるものと思われる。前回調査時と比較して、大きな変化は確認されない。</p> <p><b>【調査プロットの代表性検討結果】</b> プロット1プロット2ともに、胸高直径40~70cm、高さ20~25m程度のブナの優占する林に設定されている。前回調査のプロット1、プロット2ともに保護対象種であるブナが生育する保護林の代表的な地点といえるため、前回調査プロットを活用して調査を行う。プロット2には、胸高直径 113cmのブナが含まれている。</p>	<p><b>【調査プロット1(継続):ブナ群落】(標高892m)</b> ① 山腹平衡斜面に成立しているブナ群落。気候的極相林。 ② 高木層は高さ18~30m、胸高直径30-77cm(最大はブナ)、植被率80%で、ブナが優占し、アカイタヤなどが混生している。 ③ 高木層・亜高木層を構成する胸高直径18cm以上の保存対象樹種であるブナは12本が生育し(最大は77cm)、ブナと上層で競合する落葉広葉樹は、アカイタヤ、ホオノキ、オオバボダイジュなど10本が生育している(最大はオオバボダイジュの57cm)。高齢木からなるブナとブナ林の構成樹木である落葉高木が混在して生育する様相を呈している。 ④ 次世代を担うブナの中低木(小円部:胸高直径1cm以上、中円部:4cm以上18cm未満)は認められないが、小円部における植生調査の結果では、草本層に比較的多くのブナ実生の生育が認められる。ただし、プロット内や周辺には、現在のところ、ブナの低木・稚樹が生長していけるギャップは見受けられない。</p> <p><b>【調査プロット2(継続):ブナ群落】(標高907m)</b> ① 山腹平衡斜面に成立しているブナ群落。気候的極相林。 ② 高木層は高さ18~30m、胸高直径30-101cm(最大はブナ)、植被率80%で、ブナが優占し、アカイタヤなどが混生している。 ③ 高木層・亜高木層を構成する胸高直径18cm以上の保存対象樹種であるブナは10本が生育し(最大は101cm)、ブナと上層で競合する落葉広葉樹は、アカイタヤが2本が生育しているのみである(最大は26cm)。高齢木~老齢木からなるブナが優占するブナ純林の様相を呈している。 ④ 次世代を担うブナの中低木(小円部:胸高直径1cm以上、中円部:4cm以上18cm未満)は10本が生育し、小円部における植生調査の結果では、草本層に比較的多くのブナ実生の生育が認められる。ただし、プロット内や周辺には、現在のところ、ブナの低木・稚樹が生長していけるギャップは見受けられない。</p> <p><b>【小円部~大円部における、計測対象外の保存対象樹種の低木・稚樹の生育分布状況】</b> ① 小円部~大円部における、計測対象外のブナの低木・稚樹の生育分布状況は別紙の通りである。 ② 両プロットともに、ブナの低木・稚樹、実生の生育が認められるが、現在のところ、ブナの低木・稚樹が生長していけるギャップは見受けられない。低木以下のブナは親木による被陰に耐えている。仮にギャップが生じれば目覚ましく成長するのがブナの特徴でもある。長期的な観察が望まれる。</p>	-	-
評価	-	ブナの高木・亜高木は、健全に生育している。また、低木・稚樹、実生も比較的多く生育している。このため、遺伝資源保全上の大きな問題は生じていないと評価される。	-	-
課題	林内に中木・低木の生育は少ないため、プロット内においては、小・中・大円の8区画ごとにブナの低木・稚樹・実生の被度・群度や生育本数を記録するなど、調査マニュアルの適用だけでは把握しきれない、低木・稚樹の動態把握手法を併用することが必要である。	ブナの高木・亜高木、低木・稚樹は、健全に生育している。このため、遺伝資源保全上の大きな問題は生じていないが、現在のところ、ブナの低木・稚樹が生長していけるギャップは見受けられない。低木以下のブナは親木による被陰に耐えている。仮にギャップが生じれば目覚ましく成長するのがブナの特徴でもある。長期的な観察が望まれる。	-	-

既設区分	名称	面積 (ha)	設定目的	植生概況	保護林の再編に関する検討	新区分および新名称
林木遺伝資源保存林	栗原川ウダイカンバ くりはらがわ	11.75	栗原川におけるウダイカンバの遺伝資源を保存するため設定する。	イヌブナやミズキ、シナノキ等の落葉広葉樹が混じるウダイカンバ林。保護林内は、ほぼ全域にわたって、高木層に胸高直径20～30cm程度のウダイカンバが優占し（被度・群度4・4程度）、シラカンバ、シナノキ、ブナ、モミなどが混生している。ただし、ウダイカンバには、枯損している個体が散見され、衰退の傾向も見受けられる。	栗原川ウダイカンバ林木遺伝資源保存林は、先駆性樹種のウダイカンバの遺伝資源の保存を目的とした保護林である。①先駆性樹種ではあるものの当局内で群落を形成しているウダイカンバは少なく、その個体群を保護対象としていること、④遺伝資源の保護を目的とする個体群を対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：栗原川ウダイカンバ 遺伝資源

第2回再編委員会における議論  
先駆種ウダイカンバの扱い

栗原川ウダイカンバ林木遺伝資源保存林は、先駆性樹種のウダイカンバの遺伝資源の保存を目的とした保護林である。①先駆性樹種ではあるものの当局内で群落を形成しているウダイカンバは少なく、その個体群を保護対象としていること、④遺伝資源の保護を目的とする個体群を対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：栗原川ウダイカンバ 遺伝資源
--	--------------------------------

■検討事項：①人為的施業の必要性の検討。保護林として位置付けるが、先駆種のウダイカンバを維持していくためには、伐開地の形成などによる更新可能適地の創出が必要になることから、今後の管理を検討する（ウダイカンバ維持のため人為的施業も行う）。①の場合、保護林外の更新適地の検討も必要となる場合も考えられる。【様式31参照】

■今後の検討課題：②鳥獣害対策の検討。シカの食害を受けている林床植生の回復。

事務局案

■検討事項：①ウダイカンバの希少性 ■検討事項：②人為的施業の実現可能性 ■検討事項：③総合的に見た当該森林の方向性	
--	--

【様式31参照】





既設区分	名称	面積 (ha)	設定目的	植生概況	保護林の再編に関する検討	新区分および新名称
林木遺伝資源保存林	白川カシ群落 しらかわ	3.19	アカガシ、ウラジロガシ、スタジイ、タブ等の常緑広葉樹を主とした暖温帯の天然林である。林内には、ルリミノキ、カクレミノ等の大径木があり、多様な樹種構成を持つ林木遺伝資源として貴重なため設定する。	アカガシ、ウラジロガシ、スタジイ等の常緑広葉樹を主とした暖温帯の天然林で、これらの常緑広葉樹にケヤキやオニタヤ等の落葉広葉樹が混交する林分があり、常緑樹、落葉樹ともに大径木により構成されている。保存対象樹種であるアカガシ・ウラジロガシなどの常緑広葉樹の最大胸高直径は96.0cm (25.0m)。植生遷移上の次世代を担う樹種として、中齢級のアカガシ、ウラジロガシ、カゴノキなどの常緑樹が林内に生育している。	白川カシ群落林木遺伝資源保存林は、暖温帯上部の常緑樹林を構成する樹種の遺伝資源の保存を目的とした保護林である。5ha以上の面積要件は満たしていないが、②常緑広葉樹林帯の上限地域のカシ林として重要であり、④このような植生帯に生育する常緑広葉樹の遺伝資源の保護を目的としているため、希少個体群保護林としてのポテンシャルがある。このため、保留扱いとする。	保留

区域の拡張

白川カシ群落林木遺伝資源保存林は、暖温帯上部の常緑樹林を構成する樹種の遺伝資源の保存を目的とした保護林である。5ha以上の面積要件は満たしていないが、②常緑広葉樹林帯の上限地域のカシ林として重要である。また、このような植生帯に生育する常緑広葉樹の④遺伝資源の保護を目的とした保護林でもある。このため、保護林区域を拡張した上で、希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 新名称：白川ウラジロガシ 遺伝資源
---	-------------------------------

■検討事項：保護林の北東側に接し、同様の林相を有する天然林の分布する区域を保護林に組み込み、面積の拡張を図る。【添付図参照】

様式-31

現地調査計画及び総括整理表		写真1	写真2	写真3	
保護林名	栗原川ウダイカンバ林木遺伝資源保存林				
整理番号	032				
森林管理局名	関東森林管理局				
① 現地調査計画		森林調査		動物調査	利用動態調査
保護林概況写真	調査項目	保護林の概況 (設定目的)			
	調査箇所(選定理由) ・ルート(所要時間)	栗原川におけるウダイカンバの遺伝資源の保存。 ・設定:平成2年 面積:8.28 ha		-	-
	調査時期、回数	第1回モニタリング地点(H21年度設置)を活用する。調査プロットは、ウダイカンバが生育する林分に2地点設定されている。駐車地点から調査地点まで約100m~200m、徒歩5分~10分程度。		-	-
	調査項目	平成26年8月/計1回		-	-
	調査方法 (選定理由)	毎木調査、植生調査、定点写真撮影		-	-
		0.1haのプロットを設定し、毎木調査では胸高直径、樹高(20本/プロット)を計測した。植生調査では、植物の種組成の概要を把握した。		-	-

保護林概観 保護林遠景

② 総括整理表

調査項目	基礎調査	森林調査	動物調査	利用動態調査
結果概要	<p><b>【保護林概況】</b> 本保護林はジュウリン沢の左岸から尾根にかけての範囲にある。保護林周辺はほとんどが国有林で、育成天然林が最も多く分布しており、保護林の四方も育成天然林に接している。保護林内にはカラマン植林、周辺地域にはカラマン植林及びクリーミズナラ群落分布している。また、栗原川流域にはダケカンバ群落分布している。</p> <p><b>【保存対象樹種:ウダイカンバ(林木遺伝資源の保存)】</b> <b>【平成25年度基礎調査結果】</b> 保護林内は、ほぼ全域にわたって、高木層に胸高直径20~30cm程度のウダイカンバが優占し(被度・群度4・4程度)、シラカンバ、シナノキ、ブナ、モミなどが混生している。亜高木にウダイカンバは見られず、次世代を担う、ウダイカンバの低木や稚樹も生育していない。高木層におけるウダイカンバの被度が高いため、当面はウダイカンバ林として維持されるものと思われる。ただし、枯損している個体が散見され、衰退の傾向も見受けられる。前回調査時と比較して、大きな変化は確認されない。混生するダケカンバの方が衰退傾向が強く、倒木が多く見られる。保護林内の全体的に、林床はスズタケが4・4程度に繁茂しているが、シカ食害により、葉量が著しく少ない状態にある。また、尾根上には、モミが優占して生育しているが、こちらはツキノワグマによる樹皮剥ぎがひどく、ほとんどのモミの根元付近に樹皮剥ぎ跡がみられる。樹皮剥ぎにより枯損したと思われるモミも数本みられる。</p> <p><b>【調査プロットの代表性検討結果】</b> 保護林全体が、上記の様な林相となっており、プロット1と2ともに、ウダイカンバの優占する林(胸高直径20~40cm程度、高さ18~22m)に設定されている。前回調査のプロット1、プロット2ともに保護対象種であるウダイカンバが生育する保護林の代表的な地点といえるため、前回調査プロットを活用して調査を行う。</p>	<p><b>【調査プロット1(継続):ウダイカンバ群落】(標高1,437m)</b> ① 山腹平衡斜面に成立しているウダイカンバ群落。二次林。 ② 高木層は高さ18~22m、胸高直径25~47cm(最大はダケカンバ)、植被率80%で、ウダイカンバが優占し、ダケカンバ、ミズキなどが混生している。 ③ 保存対象樹種である、高木層・亜高木層を構成する胸高直径18cm以上のウダイカンバは12本が生育し、胸高直径の最大は44cmである。プロット内の胸高直径18cm以上のウダイカンバに枯損は認められない。一方、ウダイカンバと上層で競合する、高木層・亜高木層を構成する胸高直径18cm以上の落葉広葉樹は、アサダ、キハダ、ミズキ、ダケカンバ、イヌブナなど21本が生育している(最大はダケカンバの47cm)。亜高木層の植被率は50%とやや高いが、ウダイカンバの生育は認められず、シナノキ、キハダ、ミズキ、アサダなどによって占められている。高木層にウダイカンバと他の落葉広葉樹が混生し、亜高木層に、アサダ、ミズキ、イヌブナなどの次世代を担う落葉広葉樹が密度高く生育する様相を呈している。 ④ 次世代を担うウダイカンバの中低木(小円部:胸高直径1cm以上、中円部:4cm以上18cm未満)の生育は認められない。また、小円部における植生調査の結果でも、低木層、草本層にウダイカンバの低木・稚樹の生育は認められない。</p> <p><b>【調査プロット2(継続):ウダイカンバ群落】(標高1,458m)</b> ① 山腹平衡斜面に成立しているウダイカンバ群落。二次林。 ② 高木層は高さ17~20m、胸高直径30~53cm(最大はブナ)、植被率80%で、ウダイカンバが優占し、ブナ、シナノキ、ミヤマザクラなどが混生している。 ③ 保存対象樹種である、高木層・亜高木層を構成する胸高直径18cm以上のウダイカンバは15本が生育し、胸高直径の最大は41cmである。プロット内の胸高直径18cm以上のウダイカンバに枯損は認められない。一方、ウダイカンバと上層で競合する、高木層・亜高木層を構成する胸高直径18cm以上の落葉広葉樹は、ブナ、シナノキ、ミヤマザクラ、ウハリダカエデ、アサダ、オノオレカンバ、ミズメ、ヒノキなど41本が生育している(最大はブナの53cm)。亜高木層の植被率は60%とやや高いが、ウダイカンバの生育は認められず、シナノキ、アサダ、ミズメなどによって占められている。高木層にウダイカンバと他の落葉広葉樹が混生し、亜高木層に、シナノキ、アサダ、ミズメなどの次世代を担う落葉広葉樹が密度高く生育する様相を呈している。 ④ 次世代を担うウダイカンバの中低木(小円部:胸高直径1cm以上、中円部:4cm以上18cm未満)の生育は認められない。また、小円部における植生調査の結果でも、低木層、草本層にウダイカンバの低木・稚樹の生育は認められない。</p>	-	-
評価	-	保護林内のウダイカンバは、多くのものに樹勢が衰えている様子はなく、当面はウダイカンバ林として維持されるものと思われる。ただし、次世代を担うウダイカンバの亜高木、低木、稚樹が全く見られず、亜高木層以下には、次世代を担う、シナノキ、ミズメなどが控えており、将来的には、他の樹種が優占する林に遷移していくと評価される。	-	-
課題	保護林内のウダイカンバは、多くのものに樹勢が衰えている様子はなく、当面はウダイカンバ林として維持されるものと思われる。ただし、枯損している個体が散見され、衰退の傾向も見受けられる。また、稚樹が全く見られないことから今後ウダイカンバは消失し、他の樹種が優占する林に遷移していくと考えられる。このため、ウダイカンバの枯損状態の進行とそれに伴う遷移の進行状態に留意した監視を行っていくことが必要である。	保護林内のウダイカンバは、多くのものに樹勢が衰えている様子はなく、当面はウダイカンバ林として維持されるものと考えられるため、今後もウダイカンバの枯損状態の進行とそれに伴う遷移の進行状態に留意した監視を行っていくことが必要である。また、保護林内の全体的に、林床はスズタケが4・4程度に繁茂しているが、シカ食害により、葉量が著しく少ない状態にある。また、尾根上には、モミが優占して生育しているが、こちらはツキノワグマによる樹皮剥ぎがひどく、ほとんどのモミの根元付近に樹皮剥ぎ跡がみられる。樹皮剥ぎにより枯損したと思われるモミも数本みられる。ウダイカンバは陽樹のため、保護林内での更新が見込めないため、シカの食害により林木遺伝資源の保存に直接的な影響を及ぼすことはないが、林床の裸地化の事前防止のためには、シカの個体数の密度管理など抜本的な対策を実施することが必要と考えられる。	-	-

■ 白川カシ群落 林木遺伝資源保存林



既設区分	名称	面積 (ha)	設定目的	植生概況	保護林の再編に関する検討	新区分および新名称
林木遺伝資源保存林	津島マツ つしま	3.43	津島マツの代表的な林分、学術又は森林施業上の考証として重要なため設定する。	この地域のアカマツ林は安定した古い地層が露出して風化しているような緩やかな尾根筋の貧栄養で水はけのよい立地に成立しており、津島マツはこのような立地で生育するアカマツから得られた林業種である。	5ha以上の面積要件に達しないことから、面積要件のみでは廃止の方向となる。ただし、国有林に囲まれた保護林であるため、拡張し、存続可能な方策を検討することも可能である。平成28年時点では帰宅困難地域の区域内にあるため、現時点では到達不可にあり、調査も不可なため、判断を保留する。	保留

事務局案

津島マツ林木遺伝資源保存林は、樹齢150年生アカマツの遺伝資源の保存を目的とした保護林である。5ha以上の面積要件は満たしていないが、②老齢木からなるアカマツの遺伝資源の保護を目的としているため、希少個体群保護林としてのポテンシャルがある。ただし、本保護林は、避難指示区域（帰宅困難区域）にあり、現時点での調査は不可である。また、本保護林は国有林に囲まれた保護林であるものの、周囲3方向は遊々の森となっており拡張のための調整が必要である（遊々の森は協定が締結されている国有林であり協定相手と調整が必要であるが、避難指示区域にあるため調整ができない状況にある）。このため、保護林区域の拡張を検討せず、例外として、3.43haのまま希少個体群保護林とする。	希少個体群保護林 津島マツ 遺伝資源
--	-----------------------

既設区分	名称	面積 (ha)	設定目的	植生概況	保護林の再編に関する検討	新区分および新名称
林木遺伝資源保存林	白山ケヤキ はくさん	3.01	裏日本型東北・北海道型におけるケヤキの遺伝資源を保存するため設定する。	山腹平衡斜面の急傾斜地に成立しているケヤキ群落。土地的極相林。高木層は高さ20~25m、胸高直径30-58cm（最大はケヤキ）、植被率100%で、ケヤキの他、アカイタヤ、ヒトツバカエデ、メグスリノキ、ケンボナシなどの溪畔林を形成する高木類が混在して生育している。	白山ケヤキ林木遺伝資源保存林は、裏日本型東北・北海道型におけるケヤキの遺伝資源の保存を目的とした保護林である。5ha以上の面積要件は満たしていないが、⑤土地的極相林を形成しているケヤキの個体群、④遺伝資源の保護を目的とする個体群を保護対象としているため、希少個体群保護林としてのポテンシャルがある。このため、保留扱いとする。  ■今後の検討課題：①保護林区域の検討。保護林の南側に接して分布している同様な林相にある林分の一体的な保全の必要性を検討する。	保留

区域の拡張

白山ケヤキ林木遺伝資源保存林は、裏日本型東北・北海道型におけるケヤキの遺伝資源の保存を目的とした保護林である。5ha以上の面積要件は満たしていないが、⑤土地的極相林を形成しているケヤキの個体群、④遺伝資源の保護を目的とする個体群を保護対象としているため、保護林区域を拡張した上で、希少個体群保護林とする。  ■検討事項：保護林区域の拡張。保護林の南側に接する保健保安林（自然維持タイプ）の区域を保護林として拡張する。【添付図参照】	希少個体群保護林 新名称：白山ケヤキ 遺伝資源
---	----------------------------

■ 白山ケヤキ 林木遺伝資源保存林

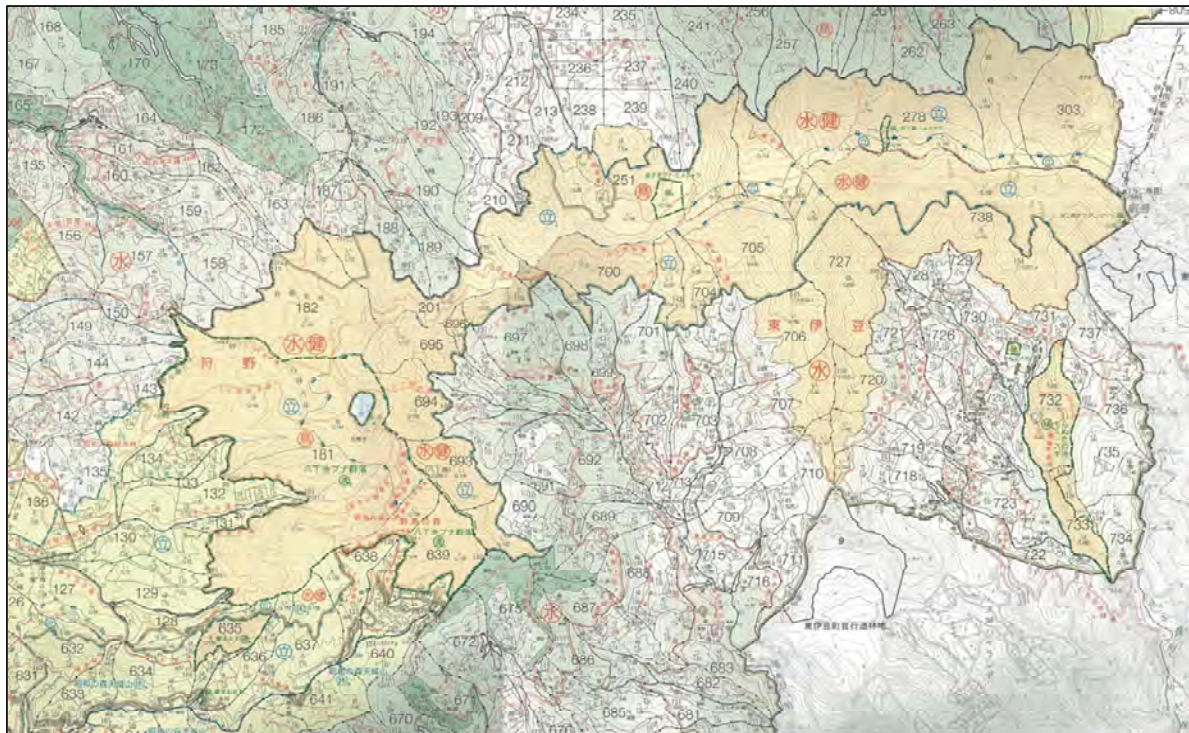


既設区分	名称	面積 (ha)	設定目的	植生概況	保護林の再編に関する検討	新区分および新名称
林木遺伝資源保存林	八丁池ブナ群落 はっちょういけ	252.58	八丁池周辺のブナを主とした天然林で、樹齢が高く原生状態を保っていることから、林木遺伝資源として貴重である。また、伊豆半島の植物地理や植物気候を知る上でも貴重なものであり、これらを保存するため設定する。[保護対象種：ブナ、イヌシデ、ハリギリ、モミ]。	ブナを主とした天然林。胸高直径30~100cm程度のブナの中齢木~老齢木が散在し、ホオノキ、ヒメシヤラ、イヌシデなどの落葉高木が混生する林となっている。ニホンシカによる林床植生の食害が著しく、スズタケはほぼ枯損状態にあり、低木類、落葉広葉樹の実生もほとんど見られない。保護対象樹種であるブナ、イヌシデは多く生育するが、モミ、ハリギリは少ない状況にある。	八丁池ブナ群落林木遺伝資源保存林は、活動を終えた火山である天城山の西麓にあるブナを主体とした天然林である。一方で、皮小平ブナ・ヒメシヤラ植物群落保護林は、約3,000年前と地史的に新しい時期に噴火した溶岩上に成立しているブナを主体としヒメシヤラが混生する天然林である。このように、両保護林とも火山地形上に成立した天然林であるといった共通性を有しながらも、地史的には、新旧を対比できる特徴を有する地域固有の生物群集を形成しているため、生物群集保護林としてのポテンシャルがある。このため、保留扱いとする。	保留
植物群落保護林	皮子平ブナ・ヒメシヤラ かわこだいら	4.06	極相のブナの下に途中相のヒメシヤラが密生する天然林で、植生遷移上珍しいものでありこれを保護するため設定する。	当該地域は約3,000年以前に噴火した火口で、やや湿った環境を持ち、ブナ林を上層木として林内に樹高の揃ったヒメシヤラが密生する。高木層は高さ25~32m、胸高直径38~74cm（最大はブナ）程度。	■今後の検討課題：①保護林区域の検討。八丁池ブナ群落林木遺伝資源保存林の東側から、皮子平ブナ・ヒメシヤラ植物群落保護林の西側に接して分布している同様な林相にある林分の一体的な保全の必要性を検討する。②鳥獣害対策の検討。シカの食害を受けている林床植生の回復。	

区域の拡張

<p>八丁池ブナ群落林木遺伝資源保存林は、活動を終えた火山である天城山の西麓にあるブナを主体とした天然林である。一方で、皮小平ブナ・ヒメシヤラ植物群落保護林は、約3,000年前と地史的に新しい時期に噴火した溶岩上に成立しているブナを主体としヒメシヤラが混生する天然林である。このように、両保護林とも火山地形上に成立した天然林であるといった共通性を有しながらも、地史的には、新旧を対比できる特徴を有している。このため、当該地域の火山地形の歴史を反映した保護林として位置付けるため、両保護林を統合するとともに、保護林間の国有林地を保護林として拡張し、300ha以上の面積要件を満たした生物群集保護林に移行させる。</p> <p>■今後の検討事項：保護林区域の拡張。八丁池ブナ群落林木遺伝資源保存林の東側に接する国有地から、皮子平ブナ・ヒメシヤラ植物群落保護林の西側に接する国有林を保護林区域として拡張する。 【添付図参照】</p> <p>■今後の検討課題：①地帯区分の検討。コア区域は、八丁池ブナ群落、皮子平ブナ・ヒメシヤラ群落、および、同様の天然林の林相を示す林分。バッファー区域は、周辺の人工林とすることを基本に検討する。②鳥獣害対策の検討。シカの食害を受けている林床植生の回復。</p>	<p>生物群集保護林 新名称：八丁池周辺</p>
--	------------------------------

■八丁池ブナ群落林木遺伝資源保存林、皮子平ブナ・ヒメシャラ植物群落保護林





既設区分	名称	面積 (ha)	設定目的	植生概況	保護林の再編に関する検討	新区分および新名称
林木遺伝資源保存林	富士山大沢カラマツ・イラモミ・ウラジロモミ群落 ふじさんおおさわ	252.39	大沢崩れの左岸にあって、標高1,500~2,800mにあるカラマツ、イラモミ、ウラジロモミ等を主とした天然林で原生状態を保っていることから、林木遺伝資源として貴重である。また、富士山の植物の垂直分布が模式的で、林内には、ウラゲハクサンシャクナゲの大群落があり、これらを保存するため設定する。	カラマツ、イラモミ、ウラジロモミを主体とした天然林。大沢を中心とする西向斜面に成立するカラマツ林は大径木が多く、原生的な自然環境にある。他にタカネノガリヤスダケカンハ群落、シラビソ-オオシラビソ群落分布する。	富士山の山腹には、冷温帯から高山帯にわたる日本の植生の垂直分布が模式的に存在し、我が国の気候帯または森林帯を代表する原生的な天然林として維持されてきている。現状では、個別の保護林がそれぞれ隣接して存在しており、日本の植生の垂直分布が模範的に残されている天然林として一体的に管理することが妥当と考えられる。このため、これらの保護林を統合し、300ha以上の面積要件を満たした生物群集保護林へ再編する。	生物群集保護林 新名称：富士山
林木遺伝資源保存林	浅木塚ヒノキ群落 あさきづか	20.43	丸尾の上に生じる針葉樹林は多いが、天然のヒノキが集团的に生育しているところは珍しく林木遺伝資源として貴重である。また、溶岩流上の植生遷移を知る上でも貴重なものであり、これらを保存するため設定する。	溶岩流上に成立した天然のヒノキ林（直径30~40cm程度、高さ12~18cm程度）である。保護林内にはスズクは広く見られなかったが、生育していたスズクはすべて桿のみの状態である。当地域内にはコイチョウランやキノチドリ等のラン科植物や、希少種であるオオクボシダ等確認されている。	■今後の検討課題：①地帯区分の検討。コア区域は、各保護林。バッファ区域は、周辺が国立公園特別保護地区、緑の回廊等として担保されているため、保護林内には設定せず、周辺の保全が担保された区域をバッファ区域として位置付ける。登山道、道路周辺、集団施設地区は、保全利用区域。②鳥獣害対策の検討。シカの食害を受けている林床植生の回復。	
植物群落保護林	富士山亜高山帯 ふじさんあこうざんたい	680.19	標高1,500m~2,300mに従って富士山の亜高山帯植生を代表する針葉樹の天然林で、富士山の植物の垂直分布や植生遷移を知る上で貴重であり、これを保護するため設定する。	標高1,600m付近ではウラジロモミが優占し、コメツガ等の針葉樹が混じる。亜高山層~低木層は広葉樹も混じり、草本層はスズクが繁茂している。標高2,200m付近ではシラビソが優占し、タケカンハやナナカマドが混じる。調査プロット周辺では、台風の影響と思われる倒木が多く見られた。標高2,300m付近はスコリア土壌で、裸地面積が大きく植物の生育量は少ない。オンタデやタイツリオウギ等の草本層が生育し、場所によっては樹高2m程度のミヤマハノキが群生している。標高2,660m付近ではカラマツ群落が見られ、多雪の影響や風衝地であるため、幹が湾曲している。本保護林内にはシカの糞や樹皮剥離、食痕が多く見られ、影響は大きいと思われる。		
植物群落保護林	富士山東臼塚低山帯 ふじさんひがしうすづかていざんたい	74.08	標高1,400m~1,500mの富士山の低山帯植生を代表するブナ、ミズナラ等の落葉広葉樹と主とする天然林で、富士山の植物の垂直分布を知る上で貴重であり、これを保護するため設定する。	保護林内は、10~30cm程度のオオイタヤメイゲツ、エンコウカエデなどが優占して生育する林に、単木状に大径木のブナ、ミズナラ（少ない）、クマシデなどが生育している。ニホンシカの食害の影響が顕著で、林床のスズクは桿のみの状態。前回調査時からシカの糞や樹皮剥ぎが見られているものの、まだササが繁茂していたので、変化はここ数年間で起こっている。今後、根返りや土砂崩れなどが起こる可能性もある。		

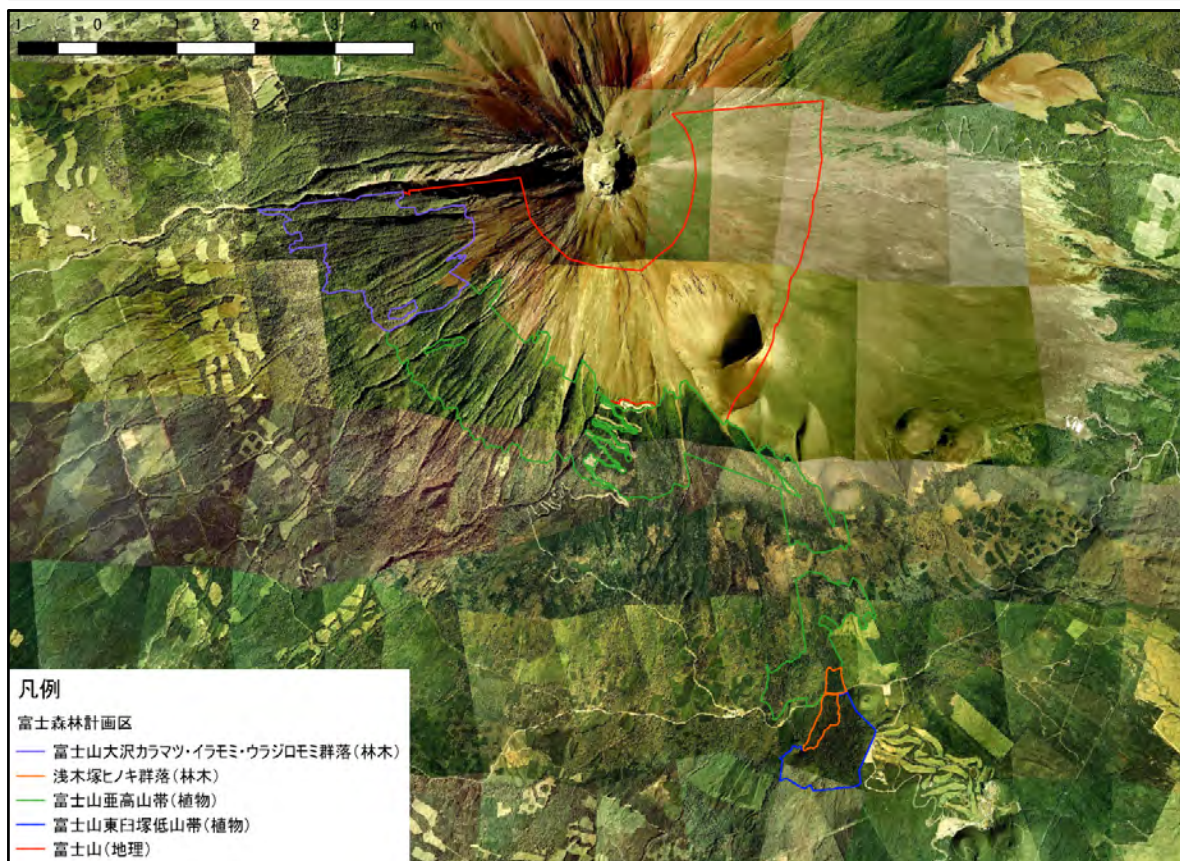
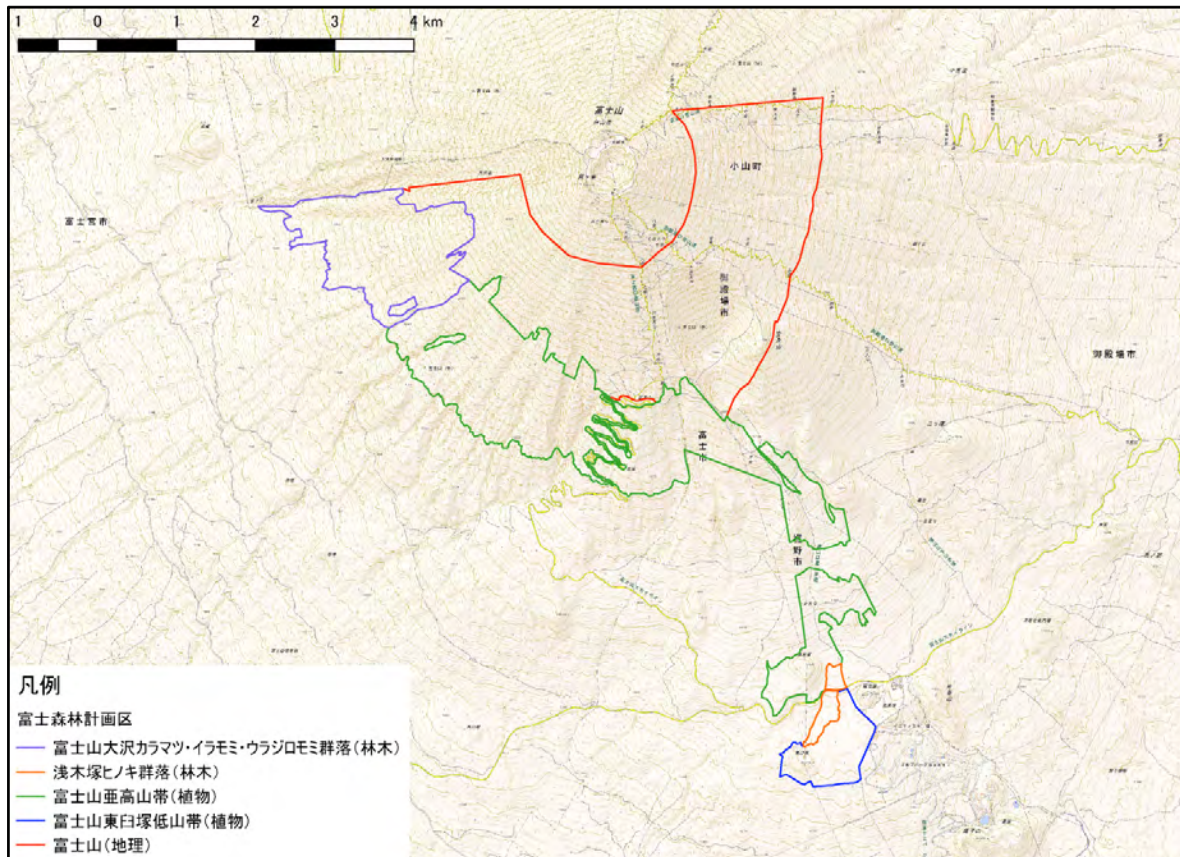
特定地理等保護林	富士山 ふじさん	926.91	富士山は、氷河期が去った後も噴火を繰り返しているため、日本アルプスで見られる代表的な高山植物は見られない。宝永4年（1707年）に噴火してきた宝永第一、第二、第三火口がある。宝永山（2,702m）が赤茶けた山肌を見せている。西側の須走では噴火により、3mもの火山灰、火山砂礫が積もった。火山灰は江戸まで飛んだ。	当該保護林は、保護林内を通過する登山ルート（富士宮ルート）が他の登山口に比べて山頂までのアプローチが最も短く、登山者の利用が多い。保護林内は、民有地に接する山頂部は自然裸地で、自然裸地からつながる斜面下部にフシハタザオ-オンタデ群落、コケモ-ミネヤナギ群落、カラマツ群落などの自然植生が分布している。	富士山特定地理等保護林については、旧特定地理等保護林としての保護対象が新しい保護林制度の保護対象に当てはまらないが、生物群集保護林としてのポテンシャルのある区域が存在するため保留扱いとする。	保留
----------	-------------	--------	---	--	---	----

廃止





富士山特定地理等保護林は、比較的近年の噴火による地質年代の違いが特徴的であり、遷移が進めば森林になりうるポテンシャルがあるかもしれない場所として位置付けられる。しかしながら、標高2,500m（森林限界）から3,200m（永久凍土下限）に位置し、現状で大部分が自然裸地であり、ほぼ全域が森林限界上に位置しているため、森林植生への遷移は期待できない区域である。このため3区分に当てはまらないため保護林としては廃止し、引き続き自然維持タイプとして管理する。なお、この区域は、富士箱根伊豆国立公園の特別保護地域に指定されている。  
【添付図参照】【様式31参照】

廃止

■ 富士山 特定地理等保護林



様式-31

現地調査計画及び総括整理表		写真1 溶岩流と溶岩流上の植生	写真2 登山口駐車場	写真3 六合目休息施設		
保護林名	富士山特定地理等保護林					
整理番号	152					
森林管理局名	関東森林管理局					
① 現地調査計画		森林調査	動物調査	利用動態調査		
保護林概況写真	調査項目	保護林の概況(設定目的)	調査箇所(選定理由)・ルート(所要時間)	調査時期、回数	調査項目	調査方法(選定理由)
	保護林外観 スコリア堆積地と火山荒原植生	富士山は、氷河期が去った後も噴火を繰り返しているため、日本アルプスで見られる代表的な高山植物は見られない。宝永4年(1707年)に噴火してできた宝永第一、第二、第三火口がある。宝永山(2,702m)が赤茶けた山肌を見せている。西側の須走では噴火により、3mもの火山灰、火山砂礫が積もった。火山灰は江戸まで飛んだ。 ・設定日:平成5年4月1日 面積:926.91 ha	第1回モニタリング調査(H21年度)では、調査プロットは設定されていない。	平成26年9月/計1回	定点写真撮影	写真撮影により、富士山の特異な地形、地質等の形質変化及び周辺森林や土地利用の状況変化の有無を把握した。

② 総括整理表

調査項目	基礎調査	森林調査	動物調査	利用動態調査																														
結果概要	<p>【保護林概要】 当該保護林は、保護林内を通過する登山ルート(富士宮ルート)が他の登山口に比べて山頂までのアプローチが最も短く、登山者の利用が多い。保護林付近は、民有地である山頂部は自然裸地で、自然裸地につながる斜面にフジハタザオ-オンタデ群集、コケモ-ミネヤナギ群落、カラマツ群落などの自然植生が分布している。</p> <p>【保護対象:富士山の特異な地形・地質】と想定</p> <p>【平成25年度基礎調査結果】 森林調査なし。</p> <p>【調査プロットの代表性検討結果】 森林調査なし。</p>	<p>【森林調査結果の概要】 本保護林は、2013年に行われた森林資源資源モニタリング調査によれば、74林班の調査地は、高木層~低木層を欠き、草本1層で構成されている。オンタデ、ミヤマヤナギ、イワオウギ、イワツメクサ等が生育する荒原植生である。</p> <p>【調査プロット1:火山荒原植生】(標高2,980m)(森林生態系多様性基礎調査ID220360) 高木層:なし、亜高木層:なし、低木層:なし、草本層は植生率10%で、オンタデ、ミヤマヤナギ、イワオウギ、イワツメクサなどが生育している。裸地率90%。</p>	-	<p>① 平成22年度から平成26年度における富士山登山者数(環境省設置赤外線カウンターデータ)を下表に示す。</p> <p>② 環境省設置の赤外線カウンターデータによると、標高が最も高く、山頂までの距離も最短となっている富士宮登山口では、72,000~78,000人程度であったが、平成26年6月に世界文化遺産に登録された、登録年である平成26年度は、57,000人程度とやや減少している。また、他の登山口からの登山者数も平成26年度はやや減少傾向にあった。</p> <p>③ 他の山岳地域の登山者の年齢層が平均的に高いのに対し、本保護林利用者を含めた富士山の登山者は若年齢層も比較的多い。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>調査年度</th> <th>富士宮口</th> <th>吉田口</th> <th>須走口</th> <th>御殿場口</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>平成26年度</td> <td>57,054</td> <td>141,996</td> <td>29,109</td> <td>15,503</td> </tr> <tr> <td>平成25年度</td> <td>76,784</td> <td>179,720</td> <td>36,508</td> <td>17,709</td> </tr> <tr> <td>平成24年度</td> <td>77,755</td> <td>189,771</td> <td>35,577</td> <td>15,462</td> </tr> <tr> <td>平成23年度</td> <td>72,441</td> <td>165,038</td> <td>40,179</td> <td>15,758</td> </tr> <tr> <td>平成22年度</td> <td>78,614</td> <td>184,320</td> <td>48,196</td> <td>9,845</td> </tr> </tbody> </table> <p>※ 7月1日~8月31日の集計結果</p>	調査年度	富士宮口	吉田口	須走口	御殿場口	平成26年度	57,054	141,996	29,109	15,503	平成25年度	76,784	179,720	36,508	17,709	平成24年度	77,755	189,771	35,577	15,462	平成23年度	72,441	165,038	40,179	15,758	平成22年度	78,614	184,320	48,196	9,845
調査年度	富士宮口	吉田口	須走口	御殿場口																														
平成26年度	57,054	141,996	29,109	15,503																														
平成25年度	76,784	179,720	36,508	17,709																														
平成24年度	77,755	189,771	35,577	15,462																														
平成23年度	72,441	165,038	40,179	15,758																														
平成22年度	78,614	184,320	48,196	9,845																														
評価	保護林の設定目的が不明確。世界文化遺産への登録後も利用者数は大きく増加していないため、適切な利用を存続することにより、富士山の特異な地形、地質等の形質変化及び周辺森林や土地利用の状況に大きな影響を与えることはないと評価される。	-	-	世界文化遺産への登録後も利用者数は大きく増加することはないと評価される。																														
課題	本保護林は、富士山の特異な地形、地質等の形質変化及び周辺森林や土地利用の状況変化の有無を把握することが調査上の課題である。特に、地形、地質、植生等の形質変化に影響を及ぼしやすい、利用者数の変化に留意することが必要である。	-	-	本保護林は、富士山の特異な地形、地質等の形質変化及び周辺森林や土地利用の状況変化の有無を把握することが調査上の課題である。特に、地形、地質、植生等の形質変化に影響を及ぼしやすい、利用者数の変化に今後留意することが必要である。																														

既設区分	名称	面積 (ha)	設定目的	植生概況	保護林の再編に関する検討	新区分および新名称
林木遺伝資源保存林	二岐山ミズメ ふたまたやま	8.17	天然生のミズメの遺伝資源を保存するため設定する。	保護林内にミズメの生育量は少く、一部に散在している程度である。ヒノキアスナロの繁茂に伴い、ミズメは衰退しつつある。高木層は高さ20~26m、胸高直径30-90cm(最大はブナ)、植被率90%で、ヒノキアスナロが優占し、ミズメ、ブナが混生して生育している。	甲子・二岐周辺冷温帯ブナ植物群落保護林は、ブナ、ミズナラ、アスナロ群落により構成された多様な森林からなる天然林である。このように、本植物群落保護林は、自然状態が十分保存された天然林を主体とした、地域固有の生物群集がまとまりを持って存在する区域で、300ha以上の面積要件を満たしていることから、生物群集保護林とする。また、同種の植生を有し、甲子・二岐周辺冷温帯ブナ植物群落保護林に隣接する「二岐山ミズメ林木遺伝資源保存林」は、一体的に管理することが妥当と考えられるため、生物群集保護林に組み込むこととする。	生物群集保護林 新名称：甲子・二岐山周辺
植物群落保護林	甲子・二岐周辺冷温帯ブナ かし・ふたまたしゅうへんれ いおんたい	3,091.91	ブナの植物群落を保護するため設定する。	甲子山、赤岳（赤崩山）、三本槍岳（三倉山）が連なる稜線の東面および鎌房山の南東面の標高700~1,800mの甲子地区と、二岐山の南東および小白森山の西面の標高900~1,600mの二岐地区の急斜面（20~40度）に成立しているブナ、ミズナラ、アスナロ群落。ほとんどの区域がブナ林に覆われ、二岐山や小白森山の山頂付近には、亜高山帯にみられる針葉樹の自然低木林であるキャラボク群落分布している。また、山腹には、アスナロ群落（ヒノキアスナロ群落を含む）が分布している。三本槍岳付近の高山帯には、コケモモやハイマツ等からなる高山低木群落分布し、その下には亜高山帯植生の草原であるササ群落が広がっている。	■今後の検討課題：①地帯区分の検討。保護林外縁部の稜線上には、高山帯低木群落、亜高山帯針葉樹自然低木群落が分布し、保護林区域のほぼ全域が、ブナやアスナロの優占する自然林によって占められていることから、保護林内をコア区域とし、保護林外にバッファ区域を設定することを検討する。②甲子・二岐周辺冷温帯ブナ植物群落保護林内におけるミズメの生育状況を把握し、ミズメの現存量が少ない場合、旧二岐山ミズメ林木遺伝資源保存林内のミズメの保全の取扱いを検討する。	

第2回再編委員会における議論

先駆種ミズメの扱い

事務局案

二岐山ミズメ林木遺伝資源保存林は5ha以上の面積要件を満たしているため統合せずとも存続可能である。また、先駆種であるため、手を加えることが必要となった際、生物群集保護林に移行させた場合には手を加えずらくなるのではないかと。

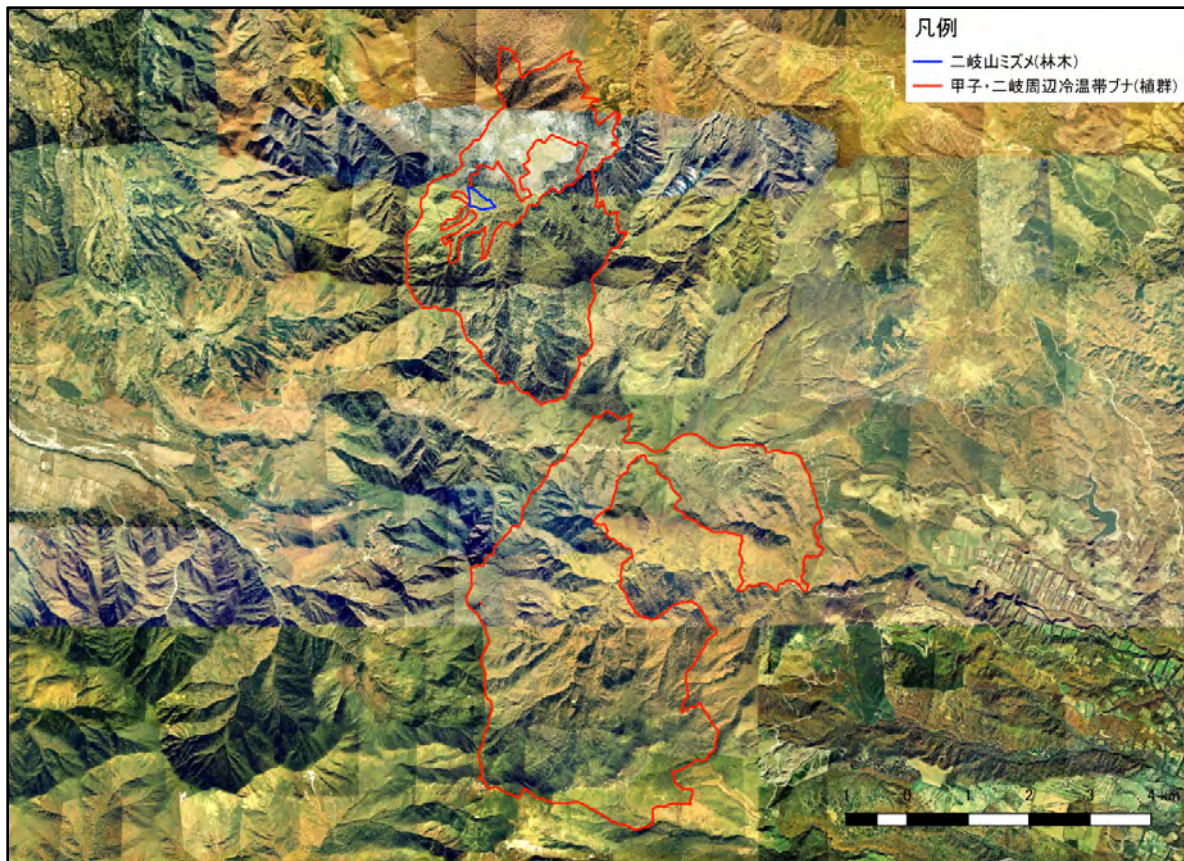
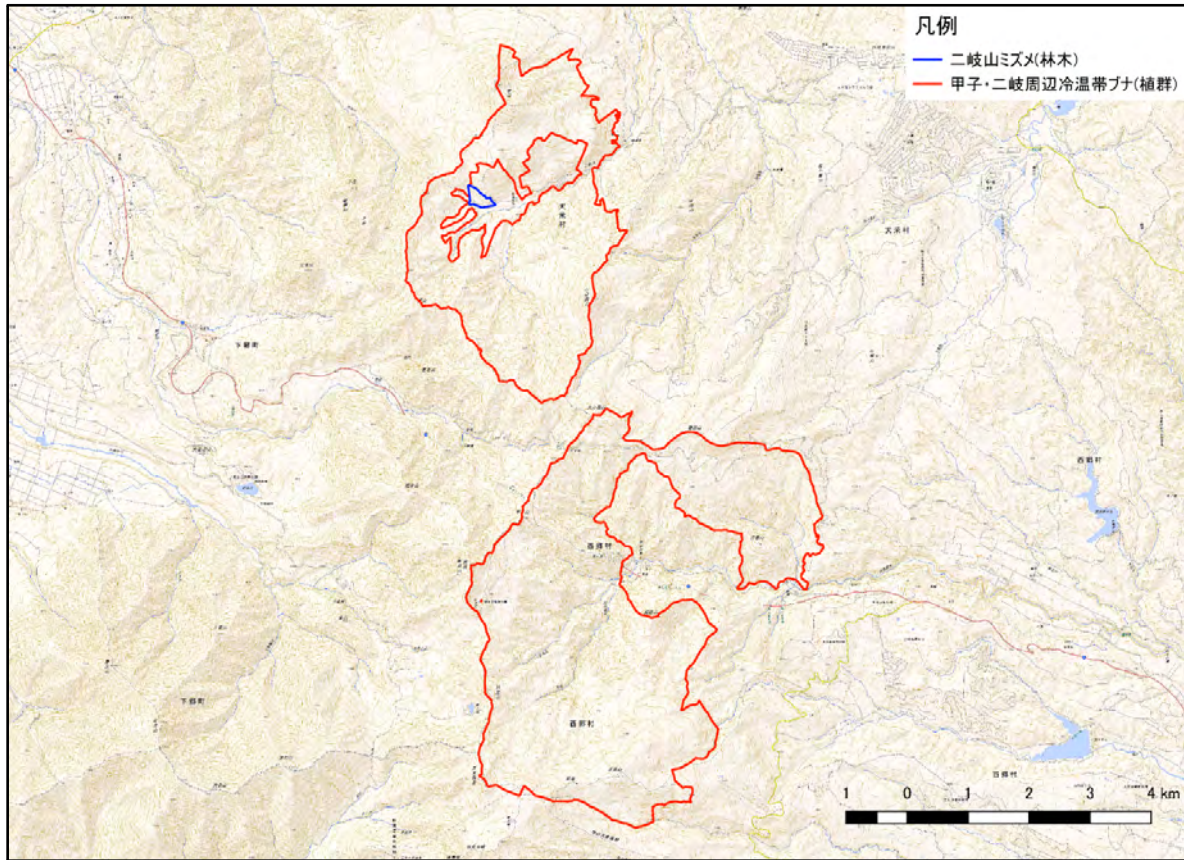
保留

ミズメは先駆種であり、更新はギャップに依存する特性がある。このため、上層のブナが倒れたり、立ち枯れた際に、更新が可能と考えられる。よって、生物群集保護林に組み込んで問題がないと考えられ、一体的に管理していくこととした。【添付図参照】【様式31参照】

生物群集保護林

新名称：甲子・二岐山周辺

■ 二岐山ミズメ 林木遺伝資源保存林 + 甲子・二岐周辺冷温帯ブナ 植物群落保護林



様式-31

現地調査計画及び総括整理表		写真1 調査プロット1:アスナロ・ミズメ群落	写真2 調査プロット2:アスナロ・ミズメ群落	写真3 ミズメ枯損木
保護林名	二岐山ミズメ林木遺伝資源保存林			
整理番号	016			
森林管理局名	関東森林管理局			
① 現地調査計画				
保護林概況写真	調査項目	森林調査		動物調査
	保護林の概況(設定目的)	天然生ミズメ林。 ・設定日:平成6年 ・面積:8.17ha		
	調査箇所(選定理由)・ルート(所要時間)	第1回モニタリング地点(H20年度設置)を活用する。調査プロットは、ミズメが比較的多く見られる林分に、2地点設定されている。駐車位置から調査地点まで約300m～500m、徒歩20分～30分程度。		
	調査時期、回数	平成25年9月/計1回		
	調査項目	毎木調査、植生調査、定点写真撮影		
調査方法(選定理由)	0.1haのプロットを設定し、毎木調査では胸高直径、樹高(20本/プロット)を計測した。植生調査では、植物の種組成の概要を把握した。保護林内に分布するミズメ大径木については、GPSを用いた踏査により位置と概略形状を記録した。			

保護林内:ミズメ老齢木

② 総括整理表

調査項目	基礎調査	森林調査	動物調査	利用動態調査
結果概要	<p><b>【保護林概況】</b> 保護林は二岐山の南側山麓、湯七八の東側に位置し、全てが天然生林である。周辺国有林は広く天然生林が分布し、育成天然林、人工林2が斑状に分布する。一部人工林1、林地外も見られる。保護林は天然生林のみと接続する。保護林の西側には民有林が広く分布し、保護林のすぐ近くには奥西部林道が通っている。また、保護林には二岐山への登山道が通っている。保護林は二岐風景林と接続する。</p> <p><b>【保存対象樹種:ミズメ】(林木遺伝資源の保全)</b></p> <p><b>【平成24年度基礎調査結果】</b> 前回調査時と比較して、大きな変化は確認されなかった。保護林内にミズメの生育量は少く、一部に散在している程度である。保護林内はチシマザサやヒノキアスナロの低木や稚樹が繁茂し、ミズメの中・低木や稚樹・実生はほとんど見られない。ヒノキアスナロの繁茂に伴い、ミズメは衰退しつつある。</p> <p><b>【調査プロットの代表性検討結果】</b> 前回調査のプロット1・2はいずれも、ミズメの高齢木を含む林相であり、保護林の代表的な地点といえるため、前回調査プロットを活用して調査を行う。</p>	<p><b>【調査プロット1【継続】:ヒノキアスナロ・ミズメ群落】(標高1,064m)</b> ①山腹平衡斜面に成立しているヒノキアスナロ・ミズメ群落。土地的極相林。 ②高木層は高さ20～26m、胸高直径30-90cm(最大はブナ)、植被率90%で、ヒノキアスナロが優占し、ミズメ、ブナが混生して生育している。 ③保存対象種である、高木層・亜高木層を構成する胸高直径18cm以上のミズメは3本が生育し、最大胸高直径は63.6cmである。プロット内の胸高直径18cm以上のミズメに枯損は認められない。老齢のブナとミズメが散在する中に、中齢のヒノキアスナロが亜高木層から高木層にわたって旺盛に生育している様相を呈している。 ④次世代を担うミズメの中低木(小円部:胸高直径1cm以上、中円部:4cm以上18cm未満)の生育はみられない。また、小円部における植生調査の結果でも、草本層にミズメ実生の生育は認められない。</p> <p><b>【調査プロット2【継続】:ヒノキアスナロ・ミズメ群落】(標高1,069m)</b> ①山腹平衡斜面に成立しているヒノキアスナロ・ミズメ群落。土地的極相林。 ②高木層は高さ17～20m、胸高直径35-95cm(最大はミズナラ)、植被率70%で、ヒノキアスナロが優占し、ミズメ、ブナ、ミズナラが混生して生育している。 ③保存対象種である、高木層・亜高木層を構成する胸高直径18cm以上のミズメは4本が生育し、最大胸高直径は85.0cmである。プロット内の胸高直径18cm以上のミズメに枯損は認められない。老齢のブナ・ミズメ・ミズナラが散在する中に、ヒノキアスナロが亜高木層から高木層にわたって旺盛に生育している様相を呈している。 ④次世代を担うミズメの中低木(小円部:胸高直径1cm以上、中円部:4cm以上18cm未満)の生育はみられない。また、小円部における植生調査の結果でも、草本層にミズメ実生の生育は認められない。</p> <p><b>【保護林内におけるミズメ成木の生育状況】</b> ①保護林内において生育が確認されたミズメ成木は、プロット1内が3本、プロット2内が4本、プロット外の保護林内が12本の計19本である(プロット外のミズメ成木は別添資料参照)。 ②生育木のほとんどは健全に生育しているが、衰弱が進行している成木が1本確認され、成木19本以外に既に枯損しているミズメが2本確認されている。</p>	-	-
評価	-	高木層を形成するミズメは若干枯損が進行しているものの健全に生育しているが、保護林内全域において次世代を担うミズメの低木・実生の生育は極めて少ない状況にある。ミズメの更新が行われていないのは、ミズメが崩積土に一斉発芽する性質を有した陽樹であるためであるが、現段階で生育しているミズメの成木は、種子散布のための母樹として非常に重要であると評価される。	-	-
課題	上層に生育しているミズメは生育量は少ないものの現時点では健全に生育しているが、ヒノキアスナロの侵入が目立ち、主木間で競争が生じているため、上層に生育するミズメの活力状態に留意する必要がある。また、次世代を担うミズメの生育量に留意する必要がある。ミズメの生育量が少ないため、保護林内に生育しているミズメ成木の分布状況の把握が必要である。	本保護林から大量のミズメ種子が散布されていることが推察される。よって、周辺で斜面崩壊が起これば、そこが次のミズメ群生地となる可能性がある(場合によっては既に群生地が形成されている可能性もあると考えられる)。ミズメの種子散布は、保護林外数100mから数kmに及ぶものと考えられるため、周辺域におけるミズメ群落の成林状態、崩壊などの地形変化の発生状況を調査・把握し、次世代を担うミズメ林木遺伝資源保全に係わる新規指定のための基礎資料を蓄積していくことが課題である。	-	-

既設区分	名称	面積 (ha)	設定目的	植生概況	保護林の再編に関する検討	新区分および新名称
林木遺伝資源保存林	武尊山シラカンバ ほたかさん	8.60	武尊山におけるシラカンバの遺伝資源を保存するため設定する。	胸高直径15~35cm程度のシラカンバが優占し、次世代を担うブナやアカイタヤが高木層に混生し始めている林相にある。保護林内のシラカンバは、多くのものに樹勢の衰えや枯損が目立ち始めている。当面はシラカンバ林として維持されるものと思われるが、次世代を担うシラカンバの亜高木、低木、稚樹が全く見られず、今後、シラカンバは消失し、他の樹種が優占する林に遷移していくと考えられる。また、本保護林に隣接するスキー場・キャンプ場敷地内のシラカンバは、直径が保護林内のものと同程度のため、同時期に成立したものと考えられる。このシラカンバは、下層が整理されているため樹勢が良い。保護林内のシラカンバは、林内に生育する落葉高木との競合が著しいため、光合成量が減少し、枯死に至っているものと考えられる。	武尊山シラカンバ林木遺伝資源保存林は、シラカンバの遺伝資源の保存を目的とした保護林である。5ha以上の面積要件は満たしているものの、陽樹のために既に衰退が認められ、今後はブナ林へと推移し、将来的にはシラカンバの遺伝資源の保存は困難と考えられる。このため、希少個体群保護林に移行せず、廃止し、引き続き自然維持タイプとして管理する。  ■なお、このまま存続させ、遺伝資源保存林としての目的を踏襲させていく場合は、伐採して、更地をつくりながらシラカンバを更新させるといった整備が必要となる。	廃止

第2回再編委員会における議論

先駆種シラカンバの扱い

武尊山シラカンバ林木遺伝資源保存林は、シラカンバの遺伝資源の保存を目的とした保護林である。5ha以上の面積要件は満たしているものの、陽樹のために既に衰退が認められ、今後はブナ林へと推移し、将来的にはシラカンバの遺伝資源の保存は困難と考えられる。しかしながら、④北海道から中部地方の気候帯を代表する形で配置されたシラカンバの林木遺伝資源保存林の一つを担っており（北海道に5ヶ所、東北、関東および中部地方にそれぞれ1ヶ所ずつ、合計8ヶ所）、その活用が期待される保護林である。このため、保留扱いとする。  ■今後の検討課題：①シラカンバの更新手法の検討。林木遺伝資源保存林としての目的を踏襲させていく場合は、競合するブナやミズナラ等の落葉広葉樹の間伐により、シラカンバの生育状態を改善させていく必要がある。なお、本保護林は、水源かん養保安林、保健保安林に指定されているため、35%を上限とする間伐率にかかり、競合木を選択的に間伐する等といった、きめ細かな管理の実施が必要になる。	保留
--	----

事務局案


<ul style="list-style-type: none"> <li>■検討事項：①シラカンバの希少性</li> <li>■検討事項：②人為的施業の実現可能性</li> <li>■検討事項：③総合的に見た当該森林の方向性</li> </ul> <p>【様式31参照】</p>	
---	--

既設区分	名称	面積 (ha)	設定目的	植生概況	保護林の再編に関する検討	新区分および新名称
植物群落保護林	板木暖帯性 いたき	10.68	リンボク、カゴノキ等暖帯性分布の北限地帯となっていることから、これを保護するため設定する。	板木国有林の山腹中央~下部に分布する天然生林である。保護林内には、アカマツ、コナラ、シラカシ等により構成される天然生林が広がっている。保護林内は、胸高直径20~30cm程度のコナラが優占し、ウラジロガシやアカシデが混在する林相となっている。尾根上には高直径40~60cm程度のアカマツが優占している。ヒサカキ、アオキ、ウラジロガシ、ヤブコウジなどの暖帯性の種は生育しているが、保護林の設定目的である暖帯性のリンボクおよびカゴノキは、プロットへのアプローチルート途中も含め、本調査では確認されず、これらの種は保護林内に局所的にしか生育していないのではないと思われる。	板木暖帯性植物群落保護林は、暖帯性分布の北限となっているリンボク、カゴノキ等の保護を目的とした保護林である。希少個体群保護林の面積要件は満たしているものの、保護林の設定目的である暖帯性のリンボクおよびカゴノキは、保護林内に局所的にしか生育していないのではないと思われる。また、本保護林は、文化財保護法に基づく史跡名勝天然記念物に指定されているため保護の担保性が高い。このため、保留扱いとし、今後の取扱いについて、現況調査を行うことなどにより、保護林として存続するのか、機能類型を引き続き自然維持タイプとして位置付けた管理を行うことにより保護を図るのか検討することとする。	保留

資源調査の実施

板木暖帯性植物群落保護林は、暖帯性分布の北限となっているリンボク、カゴノキ等の保護を目的とした保護林である。②分布の北限に生育する希少なリンボクやカゴノキなどの常緑広葉樹の生育する天然林を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。ただし、リンボクは平成5年更新の保護林台帳、カゴノキは平成19年度のモニタリング調査で確認されているのみであるため、保護林内および保護林外の国有林におけるこれら北限種の生育分布状況を合わせて把握していくことも重要である。  ■今後の検討課題：①資源調査の実施。今後、現地確認を行い、リンボク、カゴノキの生育分布状況を把握する。【様式31参照】	希少個体群保護林 新名称：板木リンボク・カゴノキ
---	-----------------------------

様式-31

現地調査計画及び総括整理表		写真1 プロット1林内 シラカンバの倒木が認められる。	写真2 プロット2林内 シラカンバの枯損立木が認められる。	写真3 保護林に隣接するキャンプ場敷地内のシラカンバ。下層が整理され、立木密度が低く抑えられているため、シラカンバの樹勢は良好である。
保護林名	武尊山シラカンバ林木遺伝資源保存林			
整理番号	031			
森林管理局名	関東森林管理局			
① 現地調査計画				
保護林概況写真	調査項目	森林調査		動物調査
	保護林の概況(設定目的)	武尊山におけるシラカンバの遺伝資源の保存。 ・設定:平成2年4月 面積:8.6 ha		
	調査箇所(選定理由)・ルート(所要時間)	第1回モニタリング地点(H21年度設置)を活用する。調査プロットは、シラカンバが生育する林分に2地点設定されている。駐車地点から調査地点まで約300m~400m、徒歩20~25分程度。		-
	調査時期、回数	平成26年8月/計1回		-
	調査項目	毎木調査、植生調査、定点写真撮影		-
	調査方法(選定理由)	0.1haのプロットを設定し、毎木調査では胸高直径、樹高(20本/プロット)を計測した。植生調査では、植物の種組成の概要を把握した。		-

保護林林内

② 総括整理表

調査項目	基礎調査	森林調査	動物調査	利用動態調査
結果概要	<p>【保護林概況】 本保護林は山裾に位置し、南西側は民有地(スキー場)に接している、南西側以外は国有林(人工林21年以上)に囲まれている。シラカンバーナナカマド群落、レンゲツツジシラカンバ群落、チジマザサブナ群団が確認されている。周辺には落葉針葉樹植林や牧草地が分布している。</p> <p>【保存対象樹種:シラカンバ】(林木遺伝資源の保存)</p> <p>【平成25年度基礎調査結果】 保護林内は、15~35cm程度のシラカンバが優占し、次世代を担うブナやアカイタヤが高木層に混生し始めている林相にある。多くのものに樹勢が衰えている様子はなく、当面はシラカンバ林として維持されるものと思われる。ただし、枯損している個体が散見され、衰退の傾向も見受けられる。前回調査時と比較して、大きな変化は確認されない。</p> <p>【調査プロットの代表性検討結果】 保護林全体が、上記の様な林相となっており、プロット2地点も、胸高直径15~40cm、高さ18~20mのシラカンバが優占する林相に設定されている。前回調査のプロット1、プロット2ともに保存対象樹種であるシラカンバが生育する保護林の代表的な地点といえるため、前回調査プロットを活用して調査を行う。</p>	<p>【調査プロット1〔継続〕:シラカンバ群落】(標高1,462m)</p> <p>① 山腹平衡斜面の緩傾斜地に成立しているシラカンバ群落。二次林もしくは植栽起源の植林。 ② 高木層は高さ16~24m、胸高直径16-42cm(最大はブナ)、植被率70%で、シラカンバが優占し、ブナ、ミズナラ、ハリギリなどが混生している。 ③ 保存対象樹種である、高木層・亜高木層を構成する胸高直径18cm以上のシラカンバは16本が生育し、胸高直径の最大は41cmである。プロット内の胸高直径18cm以上のシラカンバに5本の枯損立木が認められる。一方、シラカンバと上層で競合する、高木層・亜高木層を構成する胸高直径18cm以上の落葉広葉樹は、ブナが4本(最大42cm)、ミズナラが2本(最大21cm)、その他が8本生育し(最大はトチノキの25cm)が生育している。亜高木層の植被率が70%と高いが、シラカンバの生育は認められず、ブナ、ミズナラ、アカイタヤなどによって占められている。高木層にシラカンバとブナ・ミズナラが混生し、亜高木層に、ブナ、ミズナラなどの次世代を担う落葉広葉樹が密生して生育する様相を呈している。 ④ 次世代を担うシラカンバの中低木(小円部:胸高直径1cm以上、中円部:4cm以上18cm未満)の生育は認められない。また、小円部における植生調査の結果でも、低木層、草本層にシラカンバの低木・稚樹の生育は認められない。</p> <p>【調査プロット2〔継続〕:シラカンバ群落】(標高1,458m)</p> <p>① 山腹平衡斜面の緩傾斜地に成立しているシラカンバ群落。二次林もしくは植栽起源の植林。 ② 高木層は高さ17~20m、胸高直径24-37cm(最大はシラカンバ)、植被率30%で、シラカンバが優占し、ダケカンバ、アカイタヤなどが混生している。 ③ 保存対象樹種である、高木層・亜高木層を構成する胸高直径18cm以上のシラカンバは8本が生育し、胸高直径の最大は37cmである。プロット内の胸高直径18cm以上のシラカンバに18本の枯損立木が認められる。シラカンバは高木層で優占しているが、枯死したものが多く、樹勢の低下した個体も認められる。現存しているシラカンバは、枯死したシラカンバの空間に葉を広げつつあり、樹勢は良好である。一方、シラカンバと上層で競合する、高木層・亜高木層を構成する胸高直径18cm以上の落葉広葉樹は、アカイタヤ、ダケカンバ、アズキナシなど21本が生育している(最大はダケカンバの36cm)。亜高木層の植被率が80%と高いが、シラカンバの生育は認められず、アカイタヤ、ウラミズザクラなどによって占められている。高木層にシラカンバと他の落葉広葉樹が混在して優占し、亜高木層にアカイタヤなどの次世代を担う落葉広葉樹が密生して生育する様相を呈している。 ④ 次世代を担うシラカンバの中低木(小円部:胸高直径1cm以上、中円部:4cm以上18cm未満)の生育は認められない。また、小円部における植生調査の結果でも、低木層、草本層にシラカンバの低木・稚樹の生育は認められない。</p>	-	-
評価	-	保護林内のシラカンバは、多くのものに樹勢の衰えや枯損が目立ち始めている。当面はシラカンバ林として維持されるものと思われるが、次世代を担うシラカンバの亜高木、低木、稚樹が全く見られず、今後、シラカンバは消失し、他の樹種が優占する林に遷移していくと評価される。また、本保護林に隣接するスキー場・キャンプ場敷地内のシラカンバは、直径が保護林内のものと同程度のため、同時期に成立したものと考えられる。このシラカンバは、下層が整理されているため樹勢が良い。保護林内のシラカンバは、林内に生育する落葉高木との競合が著しいため、光合成量が減少し、枯死に至っているものと考えられる。	-	-
課題	保護林内のシラカンバは、多くのものに樹勢が衰えている様子はなく、当面はシラカンバ林として維持されるものと思われる。ただし、枯損している個体が散見され、衰退の傾向も見受けられる。また、稚樹が全く見られないことから今後シラカンバは消失し、他の樹種が優占する林に遷移していくと考えられる。このため、シラカンバの枯損状態の進行とそれに伴う遷移の進行状態に留意した監視を行っていくことが必要である。	保護林内のシラカンバは、今後消失し、他の樹種が優占する林へと遷移していくと評価されるため、林木遺伝資源保存林の設定目的に鑑み、保存対象樹種であるシラカンバを維持していくための対策に着手することが必要である。方策としては、シラカンバと上層で競合する落葉広葉樹の伐倒管理と、保護林隣接地や当該地域周辺において、若齢からなるシラカンバ林の保護林への新規設定が考えられる。	-	-



様式-31

現地調査計画及び総括整理表

保護林名	板木暖帯性植物群落保護林
整理番号	100
森林管理局名	関東森林管理局

① 現地調査計画





調査項目	森林調査		動物調査	利用動態調査
	保護林の概況 (設定目的)	リンボク、カゴノキ等暖帯性分布の北限地帯となっていることから、これを保護するため設定した。 ・設定日:昭和48年4月1日 ・面積:10.68ha		
調査箇所(選定理由) ・ルート(所要時間)	第1回モニタリング地点(H19年度設置)を活用する。 プロットは、高木層にコナラ、アカマツなど、低木層から草本層にも、ヒサカキ、アオキ、ウラジロガシ、ヤブコウジなどの暖温帯の種などがみられる林分に、2地点設定されている。 国道461号沿いの保護林際に駐車し、林内へ進入し、調査プロットに到達する。駐車位置から調査プロット1まで約180m、徒歩10分程度。駐車位置から調査プロット2まで約300m、徒歩20分程度。		-	-
調査時期、回数	平成24年9月/計1回		-	-
調査項目	毎木調査、植生調査、定点写真撮影		-	-
調査方法 (選定理由)	0.1haのプロットを設定し、毎木調査では胸高直径、樹高(20本/プロット)を計測した。植生調査では、植物の種組成の概要を把握した。		-	-



保護林 林内

② 総括整理表

調査項目	基礎調査	森林調査	動物調査	利用動態調査
結果概要	<p><b>【保護林概況】</b> 当該保護林は、板木国有林の山腹中央～下部に分布する天然生林である。保護林内には、アカマツ、コナラ、シラカシ等により構成される天然生林が広がっている。</p> <p><b>【平成23年度基礎調査結果】</b> 現地概況調査(H23年度)では、前回調査時と比較して、大きな変化は確認されなかったと報告されている。</p> <p><b>【平成24年度概況把握結果】</b> 本年度、モニタリング調査時に行った概況把握では、保護林内は、胸高直径20～30cm程度のコナラが優占し、ウラジロガシやアカシデが混在する林相となっている。尾根上には高直径40～60cm程度のアカマツが優占している。ヒサカキ、アオキ、ウラジロガシ、ヤブコウジなどの暖帯性の種が確認された。保護林の設定目的である暖帯性のリンボクおよびカゴノキは、プロットへのアプローチルート途中も含め、本調査では確認されず、これらの種は保護林内に局所的にしか生育していないのではないかと思われる。</p> <p><b>【調査プロットの代表性検討結果】</b> プロット1は、クリ・コナラが優占する林相で、ウラジロガシ、ヤブコウジ、ベニシダ、ヤブツバキなどの暖温帯の種がみられる地点であるため、前回調査プロットを活用して調査を行う。プロット2は、アカマツが優占する林相で、ウラジロガシ、ヤブコウジ、ヒサカキ、アオキなどの暖温帯の種がみられる地点であるため、前回調査プロットを活用して調査を行う。</p>	<p><b>【調査プロット1(継続):クリ・コナラ群落】(標高119m)</b> ①山腹平衡斜面に成立しているクリ・コナラ群落。二次林。 ②高木層は高さ20m、胸高直径20-47cm(最大はクリ)、植被率70%で、クリ、コナラが混交して優占し、シラカシなどが混生している。亜高木層は高さ9m、植被率60%で、マンサク、ヒサカキなどが優占して生育している。低木層は高さ4m、植被率40%で、ヒサカキが優占し、イヌガヤ、アオキなどが生育している。草本層は高さ0.3m、植被率40%で、ベニシダが優占し、テイカカズラ、ヒメカンスゲなどが生育している。コナラの枯損が目立つ。</p> <p><b>【調査プロット2(継続):アカマツ群落】(標高110m)</b> ①山腹平衡斜面に成立しているアカマツ群落。二次林。 ②高木層は高さ21m、胸高直径12-61cm(最大はアカマツ)、植被率80%で、アカマツが優占し、アカシデなどが混生している。亜高木層は高さ9m、植被率80%で、ヒサカキが優占し、ウラジロガシなどが生育している。低木層は高さ4m、植被率50%で、ウラジロガシ、アセビが優占し、ヤマツツジ、テイカカズラなどが生育している。草本層は高さ0.3m、植被率40%で、ヤブコウジが優占し、ミヤマシキミ、テイカカズラなどが生育している。</p>	-	-
評価	前回時と比較して、大きな変化は確認されなかった。林床植生が少ない傾向にある。	森林調査の結果、前回調査と比較して大きな変化は確認されなかった。林内には暖帯性林を構成するウラジロガシ、ヒサカキなどの生育が確認されており、保護林内は良好な状態で維持されている。本保護林の主要構成種である、リンボク、カゴノキは未確認である。	-	-
課題	保護林設定目的である暖帯性の植物を含む群落の継続的な保全に向け、群落動態に留意する。	プロットへのアプローチルート途中でもリンボク、カゴノキは見られず、これらの種は保護林内に局所的にしか生育していないのではないかと思われる。基礎調査において、前回調査地点を踏襲ということになっているが、リンボク、カゴノキの分布情報については言及されていない。今回の調査地点は、前回調査地点を踏襲したが、次年度調査では、本保護林の主要構成種である、リンボク、カゴノキの保護林内における分布状況を把握した上で、プロットの追加または移設を行う必要がある。	-	-

<b>現地調査方針、計画(案)</b>				
保護林名	板木暖帯性植物群落保護林			
整理番号	100			
森林管理局名	関東森林管理局			
① 現地調査計画				
保護林概況写真	調査項目	森林調査	動物調査	利用動態調査
	設定目的	リンボク、カゴノキ等暖帯性分布の北限地帯となっていることから、これを保護するため設定した。設定：昭和48年4月1日 面積：10.68ha		
	調査箇所(選定理由)・ルート(所要時間)	調査プロットは、高木層にコナラ、アカマツなど、低木層から草本層にも、ヒサカキ、アオキ、ウラジロガシ、ヤブコウジなどの暖帯性の種などがみられる林に1地点設定されている。第1回モニタリング地点(H19年度設置)を活用する。駐車地点から調査地点まで約180～300m、徒歩10～20分程度。調査プロットは、リンボク、カゴノキを含まない箇所に設定されているため、踏査によりリンボク及びカゴノキが確認された場合、プロットの追加または移設を検討する。	—	—
	調査時期、回数	夏季、1回。	—	—
保護林内概観	調査項目	毎木調査、植生調査、定点写真撮影	—	—
	調査方法	0.1haのプロットを設定し、毎木調査では胸高直径、樹高(20本/プロット)を計測する。植生調査では、植物の種組成の概要を把握する。	—	—

② 総括整理表

項目	基礎情報	前回調査結果 (平成24年度記載内容)	本年度基礎調査結果 (現地概況把握調査結果)	調査項目											
				保護対象種が健全に生育し、その遺伝資源が保存されている											
				①保護対象樹種の個体数、生育密度、②希少植物の生育の有無				①動物の生息状況、②希少動物の生息の有無				利用動態			
				毎木	植生	定点写真林内	植物相	ほ乳類	鳥類	昆虫類	指標種	希少種	利用者数	利用実態	定点撮影
必須	必須	必須	選択	抽出選択	抽出選択	選択			セット選択	セット選択					
結果概要	<p>【保護林概要】 当該保護林は、板木国有林の山腹中央～下部に分布する天然生林である。保護林内には、アカマツ、コナラ、シラカシ等により構成される天然生林が広がっている。</p> <p>【保護対象群落：リンボク、カゴノキ等を含む暖帯性樹林】</p> <p>【調査プロット設置状況】 保護対象となっている暖帯性の種が生育する代表的な場所を候補地として選定した。当保護林は5ha以上500ha未満の面積であるため、可能な限り異なる植生が含まれるよう2箇所の調査プロットを設定した。</p>	<p>【調査プロット1: クリ・コナラ群落】(標高119m) 高木層は高さ20m、胸高直径20-47cm(最大はクリ)、植被率70%で、クリ、コナラが混交して優占し、シラカシなどが混生している。亜高木層は高さ9m、植被率60%で、マンサク、ヒサカキなどが優占して生育している。低木層は高さ4m、植被率40%で、ヒサカキが優占し、イヌガヤ、アオキなどが生育している。草本層は高さ0.3m、植被率40%で、ベニシダが優占し、テイカカズラ、ヒメカンスゲなどが生育している。コナラの枯損が目立つ。</p> <p>【調査プロット2: アカマツ群落】(標高110m) 高木層は高さ21m、胸高直径12-61cm(最大はアカマツ)、植被率80%で、アカマツが優占し、アカシデなどが混生している。亜高木層は高さ9m、植被率80%で、ヒサカキが優占し、ウラジロガシなどが生育している。低木層は高さ4m、植被率50%で、ウラジロガシ、アセビが優占し、ヤマツツジ、テイカカズラなどが生育している。草本層は高さ0.3m、植被率40%で、ヤブコウジが優占し、ミヤマシキミ、テイカカズラなどが生育している。</p>	<p>【到達状況】 大きな変更はない。</p> <p>【林分概況】 保護林内は、主にアカマツ、クリ、コナラ等が優占して生育し、他にアカシデ、シラカシなどが混生している。林床には、ヒサカキ、アオキ、ウラジロガシ、ヤブコウジなどの暖帯性の種は見られるものの、保護対象種のリンボクとカゴノキは確認には至っていない。</p> <p>【調査プロットの代表性検討結果】 前回調査のプロット1は、胸高直径20～47cm程度のクリ、コナラが混交して優占する林相で、前回調査のプロット2は、胸高直径30～40cmのアカマツが優占する林相で、いずれも保護林の代表的な地点といえるため、前回調査プロットを活用して調査を行う。</p> <p>【プロット表示】 中心杭が残っており再現可能。</p>	A	A	A	C	—	—	—	—	—	—	—	—
課題等	—	保護林外の同様な林相を有する国有林も含め、保護対象種のリンボク、カゴノキの再確認のための調査が必要である。分布の北限に近いので、生育量も少なく、局所的にしか生育していないのではないかとと思われる。北限となっているいわき市ではスギ・アカマツ林の植林や竹林で確認されていることから、常緑広葉樹が優占する林相のほか、そのような林相も含めた踏査の実施が必要である。リンボク及びカゴノキが確認された場合、プロットの追加または移設を検討する。													

既設区分	名称	面積 (ha)	設定目的	植生概況	保護林の再編に関する検討	新区分および新名称
植物群落保護林	大影ミヤマツチトリモチ おおかげ	2.12	分布上稀産種のミヤマツチトリモチの自生地で学術研究上の考証として貴重なため設定する。	保護林は沢沿いの斜面地に設定されていて、胸高直径20~30cm程度のイヌブナや、ミヤマツチトリモチの寄主であるカエデ類を主体とする林が広がっている。ミヤマツチトリモチの発生時期に合わせて過年度設定の調査プロット周辺+100m程度の調査範囲を探索したが、調査時期が適切であったにも関わらず、ミヤマツチトリモチの確認には至らなかった。このため、本保護林の保護対象種であるミヤマツチトリモチの生育状態は不明である。	大影ミヤマツチトリモチ植物群落保護林は、分布上稀産なミヤマツチトリモチの生育地を保護するために設定しているが、5ha未満であり、希少個体群保護林の面積要件を満たしていない。また、現時点でミヤマツチトリモチの生育状態は不明である。このため、保留扱いとし、今後の取扱いについて、現況調査を行うことなどにより、保護林として存続するのか、機能類型を引き続き自然維持タイプとして位置付けた管理を行うことにより保護を図るのか検討することとする。	保留

資源調査の実施

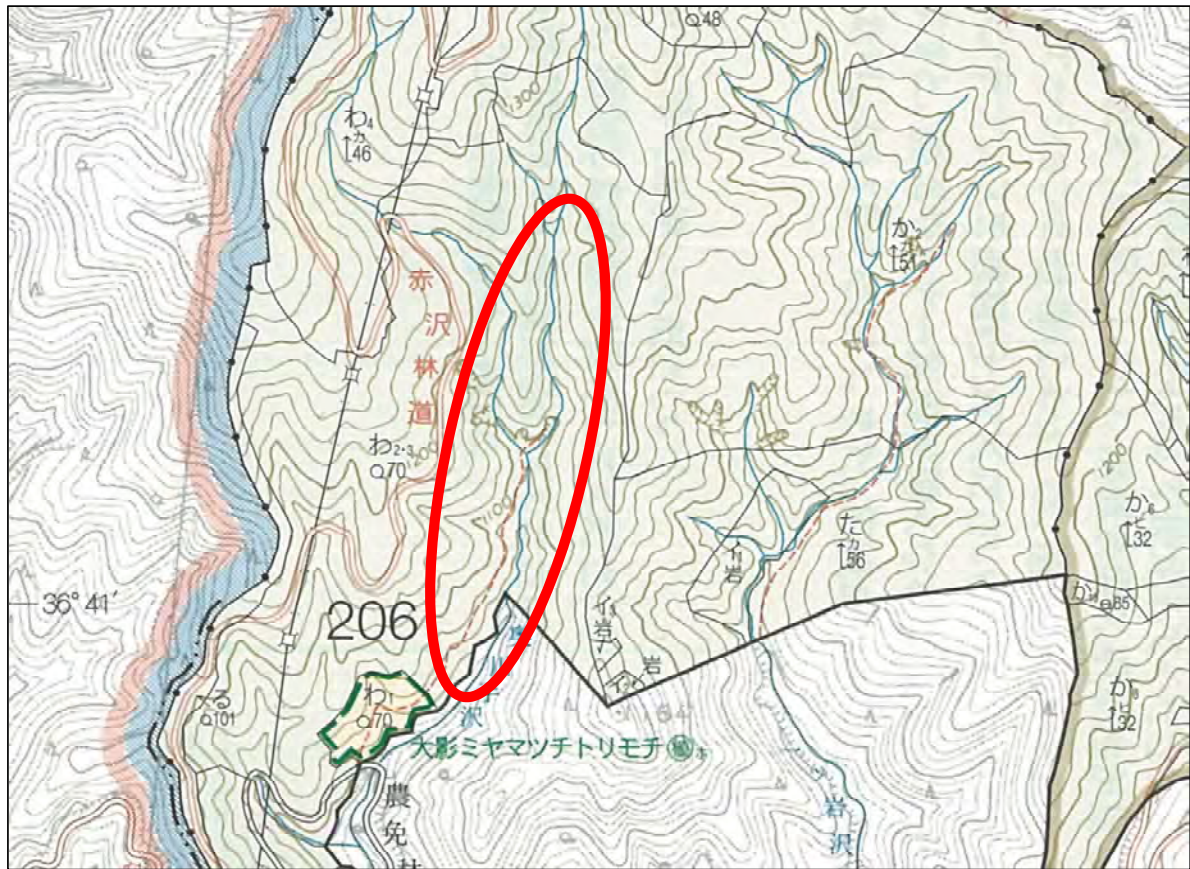
<p>大影ミヤマツチトリモチ植物群落保護林は、分布上稀産なミヤマツチトリモチの生育地を保護するために設定しているが、5ha未満であり、希少個体群保護林の面積要件を満たしていない。ミヤマツチトリモチの確認適期は8月中下旬であるが、平成21年度9月下旬、平成26年度8月下旬に行われた現地調査でミヤマツチトリモチの生育状態は不明であった。このため、一端廃止し、引き続き自然維持タイプとして管理を行う。</p> <p>■今後の検討課題：①資源調査の実施。今後、現地確認を行い、ミヤマツチトリモチが確認できれば、ミヤマツチトリモチが寄生するカエデ類（イタヤカエデ）が生育する谷筋沿いの範囲に区域拡張の上、希少個体群保護林とする。【別添図参照】【様式31参照】</p>	廃止
---	----

既設区分	名称	面積 (ha)	設定目的	植生概況	保護林の再編に関する検討	新区分および新名称
植物群落保護林	オツボギのホソバシヤクナゲ	1.23	遠州地方の一部と愛知県の三河地方にのみ自生するホソバシヤクナゲの群生地で学術上貴重であり、これを保護するため設定する。	保護林内は、胸高直径30~50cm程度のスギ・ヒノキの人工林が広がっており、ホソバシヤクナゲは草本層から低木層に生育している。保護林の南西側に接する送電線下の一部区域には、手違いによりホソバシヤクナゲごと伐採が行われた箇所があり（平成15、16年頃）、現在補植が行われている。保護林内の補植地に接する林縁部では、ホソバシヤクナゲが被度高く見られるが、林内は、スギ・ヒノキが樹冠を覆い、ホソバシヤクナゲの生育は少ない状況にある。また、生育個体には、梢端枯損木や枯損もみられ、開花結実は見られない。	オツボギのホソバシヤクナゲ植物群落保護林は、遠州地方の一部と愛知県の三河地方にのみ自生するホソバシヤクナゲの保護を目的とした保護林である。5ha以上の面積要件は満たしていないが、①遠州地方の一部と愛知県の三河地方にのみ自生するホソバシヤクナゲの希少な個体群を保護対象としているため、保護林区域を拡張した上で、希少個体群保護林に再編する。 ■今後の検討課題：①保護林区域の拡張。周辺部のホソバシヤクナゲ生育地を保護林区域に組み込むことを検討。②森林施業の実施。保護林区域内のホソバシヤクナゲの生育が不良なため、スギ・ヒノキの間伐により林内に光を取り込み、ホソバシヤクナゲの生育を促すための森林施業を実施中。	希少個体群保護林 新名称：オツボギのホソバシヤクナゲ カタカナが続くため、「の」を挿入する。

区域の拡張  
名称の変更

<p>オツボギのホソバシヤクナゲ植物群落保護林は、遠州地方の一部と愛知県の三河地方にのみ自生するホソバシヤクナゲの保護を目的とした保護林である。5ha以上の面積要件は満たしていないが、①遠州地方の一部と愛知県の三河地方にのみ自生するホソバシヤクナゲの希少な個体群を保護対象としているため、保護林区域を拡張した上で、希少個体群保護林とする。</p> <p>■検討事項：①周辺部のホソバシヤクナゲ生育地を保護林区域に組み込み、区域を拡張する。【添付図参照】②森林施業の実施。保護林区域内のホソバシヤクナゲの生育が不良なため、スギ・ヒノキの間伐により林内に光を取り込み、ホソバシヤクナゲの生育を促すための森林施業を実施中。</p>	<p>希少個体群保護林 新名称：瀬尻ホソバシヤクナゲ オツボギ林道があるがこれ以外にオツボギの名称や漢字は無い。国有林名：瀬尻国有林、また、静岡県指定天然記念物「亀山のホソバシヤクナゲ」の名称がある。</p>
--	--

■ 大影ミヤマツチトリモチ 植物群落保護林



様式-31

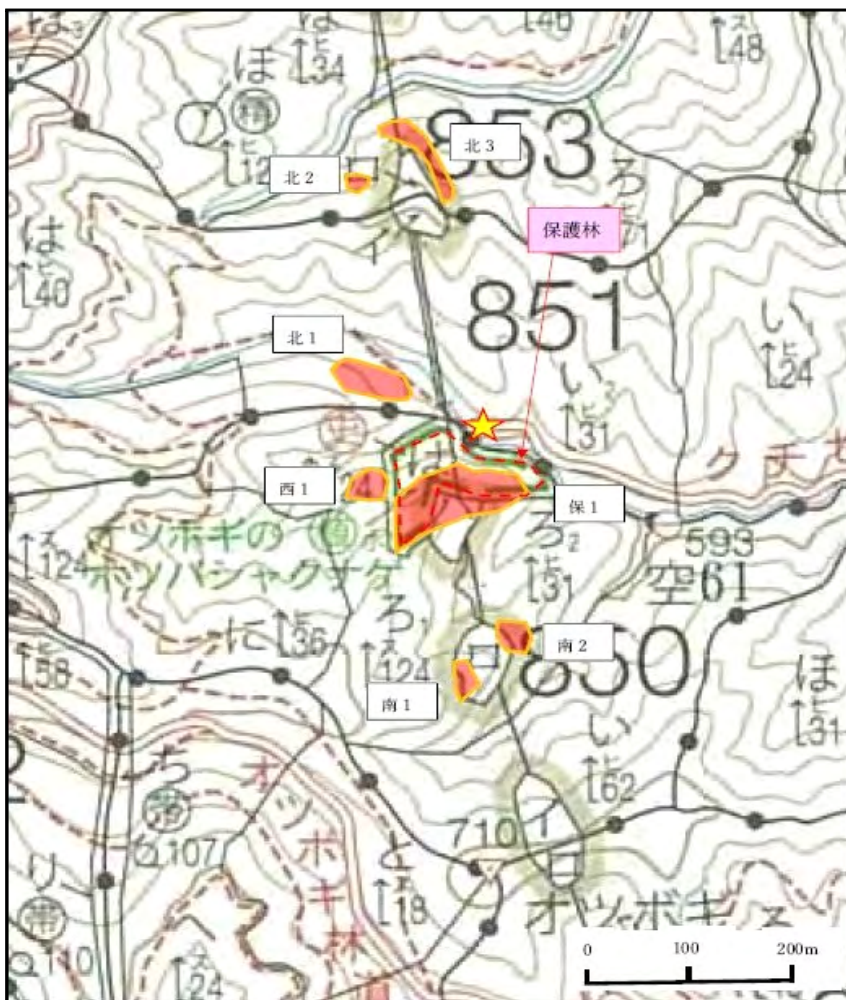
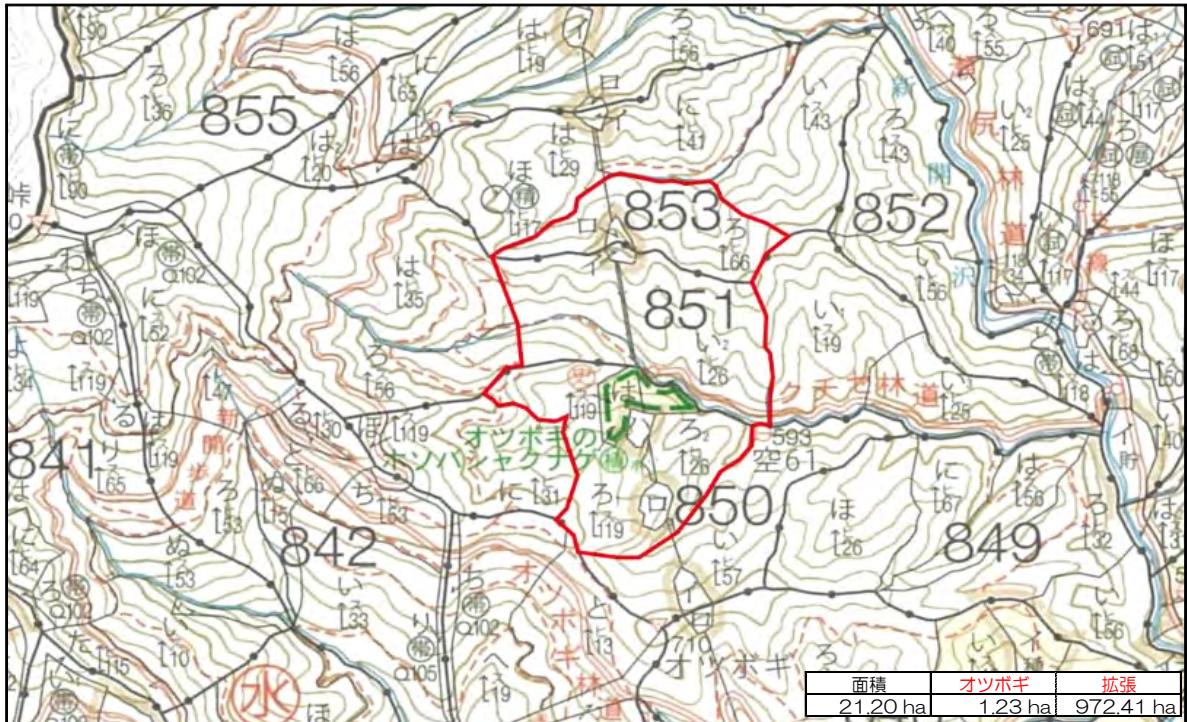
現地調査計画及び総括整理表		写真1 プロット1林内	写真2 保護林林内 沢沿いの斜面地	写真3 保護林林内 沢沿いの斜面地	
保護林名	大影ミヤマツトリモチ植物群落保護林				
整理番号	082				
森林管理局名	関東森林管理局	① 現地調査計画			
保護林概況写真					
調査項目	保護林の概況 (設定目的)	森林調査		動物調査	利用動態調査
調査箇所(選定理由) ・ルート(所要時間)	保護林内を踏査の上、ミヤマツトリモチの生育場所に調査プロットを設定する。ミヤマツトリモチの生育が未確認の場合、第1回モニタリング地点(H21年度設置)を活用する。調査プロットは、保護林内に1地点設定されているが、ミヤマツトリモチの生育は未確認の場所である。駐車地点から調査地点まで約100m、徒歩10分程度。	分布上稀産種のミヤマツトリモチの自生地と学術研究上の考証。 ・設定日:昭和51年4月1日(変更年月日 平成3年4月1日) 面積:2.12 ha		-	-
調査時期、回数	平成26年8月/計1回。ミヤマツトリモチの当該地域における発生時期に合わせ、現地調査は8月24日に実施した。	-		-	-
調査項目	毎木調査、植生調査、定点写真撮影	-		-	-
調査方法 (選定理由)	0.1haのプロットを設定し、毎木調査では胸高直径、樹高(20本/プロット)を計測した。植生調査では、植物の種組成の概要を把握した。プロット調査に合わせ、ミヤマツトリモチの生育分布状況の確認調査を実施した(植物相調査)。	-		-	-

保護林林内 プロット1林内

② 総括整理表

調査項目	基礎調査	森林調査	動物調査	利用動態調査
結果概要	<p><b>【保護林概要】</b> 本保護林は、東南斜面に面し、東南側が奥川手沢、南側が農免林道・大影秋鹿線に接している。全域が天然性林で、主たる樹種はイヌブナ、ミズナラ、その他広葉樹で、林齢は51生以上である。クレーミズナラ群落を確認され、周辺地域はクレーミズナラ群落の他、アカマツ植林、スギ・ヒノキ・サワラ植林等が分布する。昭和51年に学術参考林として設定されてからは施業経過はなく、保護対象種の特性から更新は自然の推移に委ねられている。</p> <p><b>【保護対象種:ミヤマツトリモチ】および【保護対象群落:カエデ群落】(ミヤマツトリモチの寄主となる植物群落)と想定</b></p> <p><b>【平成25年度基礎調査結果】</b> 保護林は沢沿いの斜面地に設定されていて、胸高直径20~30cm程度のイヌブナや、ミヤマツトリモチの寄主であるカエデ類を主体とする林が広がっている。ミヤマツトリモチの花期は、群馬県では8月中下旬であり(インターネット情報)、本調査はその時期に行う必要がある。多くはないが、ニホンジカの食痕、糞を確認。シカによる影響のためか、下層植生は貧弱である。</p> <p><b>【調査プロットの代表性検討結果】</b> 調査プロットも同様な環境に設定されており、胸高直径20~30cm程度、高さ15m~20m程度のイヌブナが優占している。カエデ類は、メグスリノキ、ヒナウチワカエデなどが生育している。本調査では、まず保護林内におけるミヤマツトリモチの生育分布状況の確認調査を行い、ミヤマツトリモチの生育が確認された地点へのプロット移設を予定する。確認されなければ、前回の調査プロットを活用して調査を行う。</p>	<p><b>【調査プロット1[継続]:イヌブナ群落】(標高1,040m)</b></p> <p>① 今回、調査時期が適切であったにも関わらず、過年度設定の調査プロット周辺+100m程度の調査範囲を探索したが、ミヤマツトリモチの確認には至らなかった。このため、前回の調査で設定したプロットを対象に調査を継続した。</p> <p>② 山腹凸斜面に成立しているイヌブナ。土地的極相林。</p> <p>③ 高木層は高さ16~20m、胸高直径18-43cm(最大はイヌブナ)、植被率90%で、イヌブナが優占し、ミズナラ、ホオノキ、ウダイカンバなどが混生している。亜高木層は高さ6~15m、植被率20%で、イヌブナが優占し、サワシバ、マルバマンサクなどが混生している。低木層は高さ3~5m、植被率20%で、マルバマンサク、アワブキ、アオハダなどが生育している。草本層は高さ1m、植被率20%で、タガネソウが優占している。</p>	-	-
評価	-	今回、調査時期が適切であったにも関わらず、過年度設定の調査プロット周辺+100m程度の調査範囲を探索したが、ミヤマツトリモチの確認には至らなかった。このため、本保護林の保護対象種であるミヤマツトリモチの生育状態は不明である。	-	-
課題	次年度の調査においてもミヤマツトリモチの生育分布に係わる概況把握調査を本調査に併用して実施し、ミヤマツトリモチを確認の上、その分布概況と生育場所となっている林分の群落構造を把握するための調査を実施することが課題である。ミヤマツトリモチの発生は、年によっても若干の変動があることが予想されるため、ミヤマツトリモチの生育確認には、調査は数回に渡る可能性がある。	既存資料において、本保護林内におけるミヤマツトリモチの生育分布に関する情報は乏しく、昨年度の基礎調査においては夏季に現地踏査を行ったものの時期が若干早かったようで、保護対象種であるミヤマツトリモチの生育分布の確認には至っていない。このため、本年度の調査においては、当該地域における発生時期である8月下旬に、過年度設定の調査プロット周辺+100m程度の調査範囲対象に調査を行ったが、ミヤマツトリモチの確認には至らなかった。このため、今後も、ミヤマツトリモチの生育分布に係わる概況把握調査を本調査に併用して実施し、ミヤマツトリモチを確認の上、その分布概況と生育場所となっている林分の群落構造を把握するための調査を実施することが課題である。ミヤマツトリモチの発生は、年によっても若干の変動があることが予想されるため、ミヤマツトリモチの生育確認には、調査は数回に渡る可能性がある。	-	-

■ オツボギのホソバシャクナゲ 植物群落保護林



既設区分	名称	面積 (ha)	設定目的	植生概況	保護林の再編に関する検討	新区分および新名称
植物群落保護林	迦葉山天然ヒバ かしょうざん	2.44	原生林に準ずべき林相を有する森林で(天然生アスナロ:ヒバの伏条更新が良好)学術及び森林施業上の考証として貴重なため設定する。	保護林内の斜面中腹に帯状にアスナロが分布している。ほぼ純林で、林内は暗く、下層植生は乏しい。胸高直径は、20~40cmで、若齢~中齢級のアスナロからなる。大径木の古い伐採跡(針葉樹)があり、本アスナロ群落は、伐採後の一斉林と思われる。胸高直径60cm程度のウダイカンバも生育。稚樹や幼樹は生育していないが、亜高木クラスの若い木は少数見られる。アスナロ林に隣接する広葉樹林内は、下層植生が発達しており、シカ害はほとんどない。	迦葉山天然ヒバ植物群落保護林は、原生林に準ずる林相を有したアスナロ群落の保護を目的とした保護林である。5ha以上の面積要件は満たしていないが、①伏条更新が良好なアスナロの希少な個体群を保護対象としているため、希少個体群保護林としてのポテンシャルがある。このため、保留扱いとする。  ■今後の検討課題:保護林区域の検討。保護林の東側および南側に接する区域に分布している同様な林相にある林分の一体的な保全の必要性を検討する。	保留

区域の拡張  
名称の変更

<p>迦葉山天然ヒバ植物群落保護林は、原生林に準ずる林相を有したアスナロ群落の保護を目的とした保護林である。5ha以上の面積要件は満たしていないが、①伏条更新が良好なアスナロの希少な個体群を保護対象としているため、保護林区域を拡張した上で、希少個体群保護林とする。</p> <p>■検討事項:保護林区域の拡張。保護林の東側および南側に接する林班を保護林に取り込む。【添付図参照】</p>	<p>希少個体群保護林 新名称:玉原アスナロ</p> <p>本保護林は、地域的に玉原に位置するため、玉原アスナロに名称を変更する。</p>
---	---

既設区分	名称	面積 (ha)	設定目的	植生概況	保護林の再編に関する検討	新区分および新名称
植物群落保護林	観音山の森林 かんのんやま	4.60	旧幕時代の植栽と推定される高齢のスギ林に広葉樹が侵入して天然林的な林相を呈しており、学術上貴重であり、これを保護するため設定する。	観音山国有林の、観音山の稜線沿いの南向き斜面に位置する天然生林である。保護林内には、スギ、ヒノキ、モミ等を主とした天然生林が広がっている。保護林内は、スギ(胸高直径80~90cm)が優占する林相にある。  なお、保護林の稜線から観音山に続く稜線部には蛇紋岩が分布しており、蛇紋岩変形植物として当該地域に固有かつ希少な植物である、シブカワツツジ、シブカワシロギク、カキノハグサなどの分布が認められている。	観音山の森林植物群落保護林は、5ha未満であり、希少個体群保護林の面積要件を満たしていないが、旧幕時代の植栽と推定される高齢のスギ林に広葉樹が侵入して天然林的な林相を呈し、この地域の自然林として、歴史的に位置ついた保護林である。また、観音山へと続く稜線部には、蛇紋岩変形植物として知られる希少な植物が分布している。このため、①200年生のスギ林として長期間にわたって管理されてきた希少な個体群であり、⑤稜線部の蛇紋岩地帯には、シブカワツツジ等の固有かつ希少な植物が生育する低木群落が見られるため、希少個体群保護林としてのポテンシャルがある。このため、保留扱いとする。  ■今後の検討課題:①保護林区域の検討。保護林の外側に広がる蛇紋岩地質にシブカワツツジ等の固有かつ希少な蛇紋岩変形植物が生育していることから、その区域を含めて保護できるように保護林区域の拡張を検討する。	保留

区域の拡張

<p>観音山の森林植物群落保護林は、5ha未満であり、希少個体群保護林の面積要件を満たしていないが、旧幕時代の植栽と推定される高齢のスギ林に広葉樹が侵入して天然林的な林相を呈し、この地域の自然林として、歴史的に位置ついた保護林である。また、観音山へと続く稜線部には、蛇紋岩変形植物として知られる希少な植物が分布している。このため、①200年生のスギ林として長期間にわたって管理されてきた希少な個体群であり、⑤稜線部の蛇紋岩地帯には、シブカワツツジ等の固有かつ希少な植物が生育する低木群落が見られるため、保護林区域を拡張し、希少個体群保護林とする。</p> <p>■検討事項:①保護林区域の拡張。保護林の外側に広がる蛇紋岩地質にシブカワツツジ等の固有かつ希少な蛇紋岩変形植物が生育していることから、その区域を含めて保護できるように保護林区域を拡張する。【添付図参照】【添付資料参照】</p>	<p>希少個体群保護林 新名称:観音山スギ・シブカワツツジ</p>
--	---------------------------------------